



Title	ロシア革命と農民：共同体における“スチヒーヤ”の問題によせて
Author(s)	西山, 克典; Nishiyama, Katsunori
Citation	スラヴ研究, 29, 11-40
Issue Date	1982
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5125
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113117.pdf



ロシア革命と農民—共同体における “スチヒーヤ”の問題によせて—

西 山 克 典

目 次

- はじめに
- I. 農民蜂起 (1917年9-11月)
- II. 郷・村のソヴェト権力と共同体
- III. 「総割替」(1918年春—秋)
- IV. 共同体における「政治」
- 結びにかえて

はじめに

知識人や革命家の理解を越えた民衆のもつ社会意識や行動様式の自律性は、ロシアに革命運動が始って以来、彼らの強い関心事であった。ロシア革命もまた、革命家の想定した「意識性」と「組織性」をはるかに越える、民衆の巨大な「スチヒーヤ」(стихия)を伴った¹⁾。革命後の1920年代には、知識人や研究者を強くとらえていた、民衆のもつスチヒーヤ性の問題は、しかしながら、スターリン体制下では否定的に扱れるに至った。そこでは、「党」の指導性の下での「組織性」と「意識性」が強調され、農民のスチヒーヤ性は、党の指導性を掘り崩すものと否定的に解釈され、農民運動はポリシェヴィキの農業綱領と農業政策に予定調和的に描かれた。さらに、ロシア農民の意識と行動を深く規定していた共同体の研究が途絶え、農業経済一般のなかで、貧農・中農・富農という、農民の三層区分に基づいて、農民が平板に叙述されるに至った。スターリン批判後にみられた、ソ連邦史学界の革新も、この思考の枠組を破る基本的変化をもたらしてはいない²⁾。

- 1) 「スチヒーヤ」とは、本来、自然の本源の力を指すギリシャ語に由来しているが、社会現象にこの言葉があてられると、「社会において作動する、非組織的な、何によっても規制されず、かつ指導されない力」と了解される。Д. Н. Ушаков (под ред.), Толковый словарь русского языка, т. IV, М., 1940, стб. 520.
- 2) スターリン批判後、1920年代における共同体の強固な存続が確認され、集団化前夜の農村の階級構造の再検討が始められた。В. П. Данилов, Земельные отношения в советской доколхозной деревне, 《История СССР》, 1958, № 3; 《История советского крестьянства и колхозного строительства в СССР》, М., 1965, стр. 148. 都市労働者の研究では、プロレタリアートの「意識性」, 「組織性」を社会的に非歴史的に扱うことへの批判や、民衆の「スチヒーヤ性」と「組織性」の関係を問い直す傾向も生れた。Ю. И. Кирьянов, Об облике рабочего класса России, 《Российский пролетариат: облик, борьба, гегемония》, М., 1970, стр. 107-8; О. Н. Знаменский, Советские историки о соотношении стихийности и организованности в Февральской революции, 《Свержение самодержавия》, М., 1970, стр. 283. また、近代ロシアの社会・経済構造の新たな把握が、ロシア革命の構造と結びつけて「多ウクライド性」論者によって提起される状況が生れた。см. Л. М. Герюшкин, Научная конференция «В. И. Ленин о социально-экономической структуре капиталистической России (проблемы многоукладности)», 《Известия Сибирского отделения Академии наук СССР》, серия общественных наук, 1970, № 1, вып. 1. しかし、農民運動の分野では、スターリン時代の研究枠組から脱

欧米では、ロシア農民革命の都市からの自立性と、伝統的な共同体に依拠した農民の行動が強調されてきた。しかし、郷村共同体の世界で展開された農民の行動を「スチヒーヤ」の問題として捉え、農民の社会意識の内在的分析まで立ち入った研究は現れていない³⁾。日本では、和田春樹氏が、ロシア革命における農民運動のもつ自律性を、フランス革命研究における G. ルフェーブルの理論を援用しつつ強調した。氏は語源の意味論的分析、文学作品の利用などにより、農民の社会意識の分析に迫り、また、レーニンの党=大衆論、農業綱領の読み直しを提起している⁴⁾。

以上のように、民衆のスチヒーヤが提起する問題は多様な論点を含んでいるが、本稿では、農民が発揮したスチヒーヤを具体的ないくつかの社会的局面、状況のなかで分析することにより革命期の農民運動の性格を解明したい。対象は、地域的には、中央農業地帯6県と沿ヴォルガ地帯6県に限定され、時期的には、1917年9-11月の農民蜂起と1918年春-秋の「総割替」にまたがる時期に限定される。研究課題としては、農民のスチヒーヤを、郷・村レベルにおける共同体農民の行動様式と意識構造において分析し、農民運動の「自律性」と共同体のもつ独自の文化的世界を明らかにしたい。さらに、1920年代ソヴェト政治史との関連で、1917-18年の農民スチヒーヤのもつ歴史的、社会的意義を確認・展望したい。

I. 農民蜂起 (1917年9-11月)

1917年春-夏の「協調体制」の確立期に、すでに共同体における農民のスチヒーヤは醸成されていた¹⁾。このスチヒーヤは9-11月期に農民蜂起となって爆発したが、そこに二つの波及分布が確認できる。第一に、タムボフ県コズロフ郡スイチェフカ村の9月8日の地

却できないでいる。ヴァレーエフは革命情勢に危機論から、革命情勢の熟成の主体的条件の一つの指標として大衆の意識の問題をとりあげ、農民のスチヒーヤ性に迫っている。しかし、革命運動の「弁証法」は「先進部隊」の後に「スチヒーヤ的に半ば自覚的に」大衆が従うものであり、革命過程には革命党とその指導者によって方向づけられない「スチヒーヤ的な運動、アナーキーな進出」は避けられないと指摘されるに留まっている。P. K. Валеев, Назревание общенационального кризиса и его проявления в Поволжье и на Урале в 1917 г., Казань, 1979, стр. 51, 53. マリヤフスキーの最近の研究は、1920年代の研究では、農民運動の「意識的、組織的」な側面が看過され、エス・エルの農民への影響の過大視とポリシェヴィキの農村での役割の過少評価がみられたという研究史的判断に立ち、農民の様々な統制 контроль 活動に焦点をあてている。そして、この農民の意識的・組織的行動である統制行動は、都市労働者の運動形態から借用されたものとされる。A. Д. Малявский, Крестьянское движение в России в 1917 г., март-октябрь. М., 1981, стр. 4-8.

3) D. G. G. Atkinson, *The Russian Land Commune and the Revolution*, Staoford, 1971; J. L. H. Keep, *The Russian Revolution. A Study in Mass Mobilization*, London, 1976; G. J. Gill, *Peasants and Government in the Russian Revolution*, London, 1979. しかし、革命期の民衆の研究・視角に関しては注目すべき二つの論文がある。E. J. Hobsbaum, "Peasants and Politics", *Journal of Peasant Studies*, Vol. I, 1. (October 1973), T. J. Uldricks, "The "Crowd" in the Russian Revolution; Towards Reassessing the Nature of Revolutionary Leadership", *Politics and Society* (1974).

4) 和田春樹『農民革命の世界 エセーニンとマフノ』東大出版会 1978年; 同編『世界の思想家 22 『レーニン』』平凡社 1977年。

1) 拙稿「ロシア農民革命の世界—1917年3-7月—」『北海道大学文学部紀要』29ノ2(通巻第48号), 1981年3月, 31~43頁。

主邸焼き打ちに端を発し、コズロフ郡から中央黒土地帯の近隣諸県に波及したものである。ここは、純ロシア的な農村地帯であり、地主的大土地所有を基礎とした雇役制的農業構造が形成され、それに対する闘争が、共同体に結集する農民によって伝統的に闘われてきた地域である²⁾。もう一つは、沿ヴォルガ地帯からウラル地方にかけて、チュバーシ、タタール、マリ、ウドゥムルト、バンキールなど非ロシア系諸民族を中心にロシア農民も巻き込んだ農民蜂起の流れである。ここは、ヨーロッパ・ロシアの東部辺境をなし、ロシア人による植民が県市—郡市およびその近郊地域で進められ、非ロシア系諸民族は、都市から離れた周縁的世界に農耕民として生活していた。ここは、大土地所有を欠き、民族的共同体が複雑に入り組む地域でもあった。1917年夏にすでに初期的な「総割替」が始まり非ロシア系諸民族による穀物供出への抵抗が散発していたが、9月以降、カザン県コヂモヂェミヤンスク郡アクラモヴォ郷をはじめとする、一連の地域で農民蜂起が展開していった³⁾。

1917年秋の農民蜂起に至る契機と状況は、個々の共同体で多様であったが、二つの基本

- 2) スイチェフカ村のあるヤロスラフカ郷には、14の大地主所領があり、雇役 *отработка* に依拠した典型的な地主経営が行われており、1917年3月にすでに農作業報酬引上げと地代引下げの要求が農民によって提出されていた。Я. А. Яковлев (ред.), И. В. Игрицкий (сост.), 1917 год в деревне (воспоминания крестьян), М.-Л., 1929. [以下《1917 год》と略記] стр. 68-70. スイチェフカ村の農民蜂起は、タムボフ、リャザン、トゥーラ、オリョール、クルスク、ヴォローネシ、さらにニジェゴロト、ペンザの各県に波及効果を与えた。Революционное движение в России в сентябре 1917 г. Общенациональный кризис, документы и материалы, М., 1961 [以下《Сентябрь》と略記] док. № № 504, 520-21, 523, 526, 533-4, 539, 548; Революционное движение в России накануне Октябрьского вооруженного восстания. документы и материалы, М., 1962. [以下《Октябрь》と略記] док. № № 484-5, 491, 493, 499, 510-11, 514, 519; Я. А. Яковлев (ред.), Крестьянское движение в 1917 году в документах и материалах, М.-Л., 1927. [以下《К. Д.》と略記] стр. 266-8, 277; М. И. Мельникова, Крестьянское движение в ЦЧО в период подготовки Октябрьского вооруженного восстания (сентябрь-октябрь 1917 г.), 《Из истории Октябрьской революции и социалистического строительства в СССР》, сб. статей, М., 1957, стр. 10-11; Е. А. Луцкий, Крестьянское восстание в Тамбовской губернии в сентябре 1917 г. 《Исторические Записки》, 1938, Т. 2, стр. 71.
- 3) この地域では、都市と農村の乖離・対立は、民族的諸関係のなかで一層鮮明であり深刻であった。地方行政の支配的拠点たる県郡レヴェルのロシア人植民都市とその周辺のロシア農民入植地域に対して、地理的にも文化的にも周縁的な、非ロシア系諸民族の自律した言語・慣習に支えられた共同体世界が存在した。См. 《Революционная борьба крестьян Казанской губернии накануне Октября》, сборник документов и материалов, Казань 1958, [以下《Казань》と略記], приложение. Карта распределения крестьянского населения Казанской губернии по народностям. 非ロシア系諸民族の居住地では、歴史的な地主的土地所有を欠き、国有地や御料地も少なく、6月の休閑地(秋播き冬畑用)の耕耘とともに、旧国有地農民のもとで、土地割替の問題が既に鋭く提起されていた。Е. И. Чернышев, Из истории крестьянских движений в Казанском крае в 1917 году. Казань, 1926, стр. 34-42. さらに、この非ロシア系諸民族の周縁的共同体世界は、執拗に穀物供出に抵抗する拠点地域でもあった。《Татария в борьбе за победу пролетарской революции》, сборник документов и материалов, Казань, 1957. [以下《Татария》と略記] док. № № 268, 279, 280; 《Казань》, док. № № 361, 363-5, 368, 370, 538, 586, 642; В. Л. Кузьмин, Крестьянское движение в Чувашии в период подготовки Октябрьской революции, Чебоксары, 1957, стр. 153-5. だが、この地域では、共同体を越える民族意識は明確には析出されず、農民の意識は、周縁的な共同体により強く拘束・同化されていた。

的な背景が指摘できる。まず、農作業リズムと関連した農民の動向が問題となる。農民はライ麦畑（前年秋に播種し、1917年夏に取り入れる）の取入れ後の畑地（翌年の夏畑用）の占拠・分割に促迫されていた。農民蜂起の波にとらえられたタムボフ県の貴族団長は、9月18日付の内相宛覚え書きで次のように述べていた。「この春に、暴力をもって勝手に支払いを一切おこなわずに、今年の夏畑、草刈場、翌年収穫用の休閑地が占拠された。まさに同様に、今は、1918年夏畑穀物作付用のライ麦刈り取り畑 **ржища** が占拠されている、専横の狂騒と資産の全般的な消失が生じている…」⁴⁾ 1917年秋に激化した、農民による森林盗伐もまた、冬の到来を前にした農民の、燃料確保の衝動に駆られた行動であった。農民蜂起への飛躍のバネは、共同体の伝統的な農業・生活リズムに助けられていたといえる⁵⁾。

第二に、農民の社会意識における変化が指摘できる。二月革命後には、首都で形成された臨時政府とその農業改革へ期待と幻想を抱いてきた農民に、今や革命に対する不安と危惧が生れていた。コズロフの地方紙『兵士と労働者』は、「憲法制定議会の召集延期、政治の右転回とともに、農業改革の解決に関する問題が遠ざかり、引き延ばされていると農民は本能的に理解し、気付き、そこから上からの農業改革一般について疑念が入りこんでいる」と伝えていた⁶⁾。この漠然とした不安と危惧の社会的雰囲気なかで、農民を積極的行動に駆り立てる危機意識が生れた。9月13日付で中央民警部へ宛てた電文で、コズロフ郡コミッサールは、「騒擾の原因は農民が土地を受けとらないのではないかという危惧を生んだ定まらない土地政策である」と指摘するとともに、「9月20日までにも土地が奪取されなければ、後では遅すぎるといふ噂」が流布していると述べていた⁷⁾。この不可解な噂にも、農民を強く行動に駆る危機意識が読みとれる。アクラモヴォ郷では、住民は「早くから新秩序に懐疑的かつ敵対的に対応していた」が、9月初めに穀物記帳*への住民の抵抗のなかで、「地上にアンチクリストが現れ、ロシアでケレンスキーの形をとって支配している」という煽動が行われていた。農民の間では「アクラモヴォの戦い」という口伝え **легенда** が伝播し、近隣の農民は興奮した状態にあった。この「アクラモヴォの戦い」とは、「一度に地上の全ての戦いを停止させ、その後は平和が訪れ、全ての者が限りなき土地を受けとる」と農民には理解されていたのである⁸⁾。農民の危機意識は、県・郡レベルの都市を拠点とした農村支配に対する強い反発にも窺える。スタロ・マクシムキノ郷（カザン県チストポリ郡）の土地委員会は次のように述べている。

4) 《Сентябрь》, № 507.

5) すでにジルが、農民騒擾の時期と形態を、伝統的な共同体における農作業リズムと関連させて説明しているが、農民の行動性を農繁期ではなく、農閑期にみられたとし、農作業の繁忙を騒擾の阻止要因とみなす傾向がある。G. J. Gill, "The Mainsprings of Peasant Action in 1917", *Soviet Studies*, Vol. XXX No. 1. (January 1978), pp. 75-8. しかし、地主が最も農業労働力を必要とする農繁期に、農民がブリガヴォールの作成などにより闘争を展開してきたように、農繁=農閑のリズムを農民は騒擾に有利に利用してきたのである。

6) 《Солдат и рабочий》, № 60, 1917 г., цит. по сочинению И. Д. Балашова, *Аграрное движение в ЦЧО в 1917 году*, Воронеж, 1930, стр. 53.

7) 《Сентябрь》, № 496.

8) 《Казань》, № № 647-8.

* 1917年3月25日付の臨時政府決定で穀物専売制が導入され、政府機関によって穀物記帳が行われ、農民は余剰穀物を強制的に、固定価格で国家へ供出せねばならなかった。

「そこでは〔チストポリ市—引用者〕郡土地参事会が肥え太った少数の不满者らの電話通報を聴いている。ここでは、我々は電話ではなく、直接耳で公正を要求する何百という声を聴き、その苦しみ抜いた顔を看ており、そこには、侮辱された腹立たしさと不満が明瞭に記され、民主派が不活動を非難されているとき、我々は不安を感じている。電話通報を行い、都市へ直接に馬車で行く人々の陣営からは、「コルニーロフがペトログラードへ」という乱暴な悪意ある喜びが聞かれる。ここでは、郡土地参事会が地主やその他の公正を損う人々へ同調し、郷土地委員会の決定を廃止するとしたとき、我々はひどく心を痛められた。上級機関のそのような行為が大衆に意識され、疑惑と困惑を生んでいる。

否、自からエス・エルと名のる郡土地参事会の同志よ、あなた方の何人かが言うように『狼を満腹にし、羊が無事である』ようにはできないのだ。』⁹⁾

ここでは、「そこ—ここ」「狼—羊」の表現に対比されて、地主に同調する郡土地参事会の都市を拠点とする支配に対して農民共同体による強い抵抗と拒否が、農民の危機意識とからみあって、表現されているといえる。

このように、共同体の伝統的な農業・生活リズムに促迫され、革命に対する危惧、不安に醸成されて、個々の共同体では、懲罰隊の派遣やその噂さ、穀物記帳の実施、地主の報復や地主制復活への恐れ、近隣の村々での農民蜂起の知らせ、コルニーロフ反乱や都市での革命の知らせなど、多様な直接的契機に触発されて、1917年秋の農民蜂起はスチヒーヤとして爆発した¹⁰⁾。だが、農民は破壊の本能に任せてアナーキーに行動したのではなかった。そこに一定の行動様式を読みとることができる。蜂起する農民にとって、結集の場は、多くの場合スホートであった。9月8日のスイチェフカ村のスホートがそうであり¹¹⁾、アクラモヴォ郷では、9月5日からスホートが解散されずに召集されており、軍隊と対峙し蜂起する民衆を結集する役割を果たしていた¹²⁾。共同体は、経営規模、家族構成、年齢・性別などで決して単一の社会構成をなしてはいなかったが、スホートに結集する農民は、行動において一体性を示した。多くの史料が「村ごと *селом*」「村団全体で *всем обществом*」

9) Там же, № 512.

10) 共同体の外からもたらされる軍隊や食糧記帳の物理的な実力、様々の情報とともに、地主の復活・報復に対する農民の恐れも、農民を行動に駆る大きな一因を成していた。トゥリ・オーゼラ村（カザン県スバスク郡）では、8月15日未明に教会の警鐘の下で、地主領が焼き打ちされたが、その後に地主が懲罰隊を編成して村に向っているという噂さがとぶなかで、農民はスホートで自から武装し、地主の秋播き冬畑を分割し、耕耘・播種してしまった。地主モロストフは1905年には白馬に跨がり、コサックを率いて農民騒擾の鎮圧を行っており、農民にはその記憶が蘇ったといえる。В. Бошин, Село Три Озера, 《За власть советов》, сборник воспоминаний участников октябрьских событий в Татарии, Казань, 1957, стр. 200, 205–9. 非常事態を告げる「警鐘」*набат* も、農民を呼集し彼らにある観念を想起させ、行動に駆る大きな役割を果たしている。カザン県の農民は、「1905年のそれを思い起こさせる警鐘を敏感な農民の耳は遠くから聞きとった」と指摘している。《1917 год》, стр. 106. 従って、緊迫した状況下では、「鐘の音」を制圧することが農村支配の一つの方法となった。1918年秋、クルスク県コロチャ郡では、貧農委員会の許可なく集会は開けず、また警鐘も打ってはならなかった。《Борьба за установление и упрочение советской власти в Курской губернии》, сборник документов и материалов. Курск, 1957. [以下《Курск》と略記], № 435. スターリン集団化の際の農村の鐘の音のもつ意味については、中山氏の指摘がある。中山弘正『ソビエト農業事情』（NHK ブックス, 1981年）24, 28頁。

11) 《1917 год》, стр. 70.

12) 《Казань》, № 649.

あるいは単に「全員で **всем**」と記していた¹³⁾。『ルスコエ・スローヴォ』紙は、10月18日付でリャザン県ラーネンブルグ郡の農民蜂起について報道している。それによると、地主領打ち壊しの決定は普通はスホートで行れ、スホートは村のために保全しておく建物を指定した。残りの建物は土台まで取り毀され、全ての資産が没収され、「頭割り」で農民に分配され、家へ持ち去られた¹⁴⁾。また、ニジェゴロド県のある役人は、農民蜂起の展開について、農民は村スホートで近隣地主の穀物搬出の阻止、差し押えに関して、共同体の取り決めであるプリガヴォールを作成し、武装した農民がこのプリガヴォールを持参し、20—30台の荷馬車で地主農場に現れ、穀物を取り出し均等に分配する、と報告している¹⁵⁾。蜂起のなかで、農民はスホートに結集し、共同体のもつ参加強制* に促れて「全員で」行動し、略奪物の「頭割り」平等な分配により連帯責任をとり、行動において強い一体性を確保していたといえる。

しかし、農民蜂起が個々の共同体の枠を越えて伝播し、他の村々の農民も合流する際、共同体における蜂起の行動様式とは違って、共同体集会としてのスホートの規律を越えるリーダーシップがしばしば必要とされた。この点で、故郷に戻った賜暇兵士、農村に潜伏する脱走兵などが大きな役割を果たした。彼らは郷村共同体世界の外で一定の経験を積み、とりわけ軍隊で集団的・組織的行動の訓練を経ており、共同体外の情報にも敏感であり、さらに武器の携帯者でもあった。コズロフ郡に波及した農民蜂起の先頭に立っていたのは、徒囚といわれ、綽名をチュチュルというアンドレイ・パニンスキを首領とする20名ほどから成る徒党であった¹⁶⁾。アクラモヴォ郷の蜂起では、警鐘を打ち、巡視と騎馬による斥候・偵察を行う脱走兵グループの存在が確認でき、蜂起の首謀者とされる兵士アンドレイ・ザハーロフは、彼らの指導者と推定される¹⁷⁾。このような共同体を越える社会グループの介在によって、個々の突発的な分散した共同体の農民蜂起は、一地帯に伝播し、広い地域を被る農民反乱となりえた。

1917年9—11月期の農民蜂起は、危機意識を秘め共同体に結集する農民の過激な打ち毀し、放火を伴うスチヒーヤとして現象したが、このスチヒーヤにおいて農民は、共同体の外から直接課され導入される制度・政策には冷淡な時として拒否的な態度をとり、あるいはこれを農民的世界へ同化する傾向を示した。県・郡ルヴェルでゼムストヴォ制度が導入されていた多くの地域で、8月後半から9月前半にかけて、郷ゼムストヴォ選挙が行れた。その選挙結果は、かねて地方行政改革の決め手として郷ゼムストヴォの導入を構想してきた人々に失望を与えるものであった。9月23日付『ロシア通報』紙は、ゼムストヴォ選挙

13) マリヤフスキーは、地主領打ち毀しに、貧農、中農、富農のどの層が参加したかは資料が乏しく、かつ混乱した指摘がなされているとし、地主領への攻撃には、全ての者の参加が求められたと確認している。А. Д. Малявский, указ. стч., с. 346.

14) Н. А. Кравчук, Массовое крестьянское движение в России накануне Октября, М., 1971, стр. 211.

15) 《Победа Октябрьской социалистической революции в Нижегородской губернии》, сборник документов, Горький, 1957. [以下《Нижегород》と略記] № 294.

16) 《Рабочая газета》, № 162, 16 сентября 1917 г., стр. 3; И. Д. Балашов, Аграрное движение..., стр. 53.

17) 《Казань》, стр. 23, № 650.

* このことについては、本稿 IV を参照。

はそれに向けられた期待からすると、「全体として不満足な全く陰鬱なものであった」とし、有権者の半分さらにしばしば四分の一しか投票せず、多くの郷ゼムストヴォ選挙は投票者が集まらないため成立しなかったと伝え、住民が一般的に無関心であったと指摘している。同紙は、住民がゼムストヴォを新たな税負担をもたらす不必要なものとして拒否したと、その原因を分析した¹⁸⁾。各地からの郷ゼムストヴォ選挙の結果についての報告も、住民の無関心と「無知と無経験」、地方当局の準備不足などとともに、穀物記帳の実施や税負担の増大と結びつけてゼムストヴォが拒否されたこと、住民が秘密投票を嫌悪して選挙が失敗したことを指摘していた¹⁹⁾。選出された郷ゼムストヴォは、その構成において、地方インテリや地主を排除し、専ら農民から成り、地方当局からみて、しばしば「偶然的な従って経過している現時局の諸要求に全く応しくない人物」と指摘される場合もあった。政党の選挙への参加も一部の地域を除いて弱く、政党活動の有効に機能しない無党派農民代議員から成る機関となった²⁰⁾。郷ゼムストヴォ選挙における共同体農民のこのような対応は、1917年春—夏の郷委員会や郷土地委員会の構成と活動、さらに夏から秋にかけての郷食糧委員会の組織化に対して示したそれと同じ次元で理解できる²¹⁾。選出された郷ゼムストヴォも、地主や地方インテリの参加する身分制を越えた地方自治機関としては機能せず、郷村の農民の身分制的共同体世界に同化される傾向を示したのである²²⁾。

郷ゼムストヴォとは異なり、憲法制定議会選挙へは農民は高い投票率を示した。憲法制定議会選挙は各選挙区の事情に応じて、11-12月期に殆どどの地域で行われたが、ペトログラードとモスクワの両首都と工業都市、軍隊では非常に高い投票率がみられた。他方、農村地帯のそこに点在する非工業的中小都市と郷村共同体では、投票率に明白なコントラストがみられた。前者では、投票率は低く、多くの住民が棄権したのに対し、後者では、投票率は60~80%、ところによっては90%に達した。たとえば、タムボフ県全体の投

18) 《Русские ведомости》, № 217, 23 сентября 1917 г., in R. P. Browder and A. F. Kerensky, selected and ed., *The Russian Provisional Government 1917. Documents*. Stanford, 1961, vol. II, pp. 293-4.

19) 《Нижегород》, № № 278, 298; 《Казань》, № 374. 秘密投票を嫌う共同体の慣習、農民の心情については、本稿 IV を参照。

20) 《Русские ведомости》, № 217, 23 сентября 1917 г.; 《Нижегород》, № 298; 《Победа Великой Октябрьской социалистической революции в Самарской губернии》, документы и материалы, Куйбышев, 1957. [以下《Самара》と略記] № 109. 工業コロニーを有する郷のゼムストヴォ選挙では、諸党派の選挙活動とその結果が現れ、純農村とは異なる政治風土の存在を示している。《Борьба трудящихся Орловской губернии за установление советской власти в 1917-1918 гг.》, сборник документов, Орел, 1957 [以下《Орел》と略記] № 86.

21) 村一郷のレヴェルで郷委員会、郷土地委員会は、地主やインテリなどを排除しつつ県—郡レヴェルから自立的に、共同体農民の意向にそって動き始めていた。郷食糧委員会も農民の共同体世界に同化され、その要求にそって、土地委員会と重複する活動を展開する場合もみられたが、1917年秋以降は、政府の食糧政策の遂行の故に、共同体世界からの追放と解散が頻発した。G. J. Gill, "The Failure of Rural Policy of Russia, February-October 1917", *Slavic Studies*, vol. 37, No. 2. June 1978, pp. 249, 251-2; 前掲拙稿 31-32頁。

22) 形成された郷ゼムストヴォは、その多くが共同体農民に有効な影響力を行使しえなかったが、郷委員会からその権限を引き継ぎ、「農民的」機関として土地・食糧問題等に関与していく場合もあった。См. А. В. Шестаков (ред.), *Советы крестьянских депутатов и другие крестьянские организации*, М., 1929, Т. 1. Ч. II, стр. 110-113.

票率は72%であるが、都市部では47~49%であるのに対し、郡部では74.5%であった²³⁾。農民のこの高い投票率は、エス・エルが各種の農民大会や農民ソヴェトを通じて、彼らの選挙名簿への投票を誘導したことや、エス・エルを農民が強く支持していたという論拠によっては十分に説明され得ない。そこには、農民が共同体を遙かに越える国家権力のレベルに伝統的に抱いてきた幻想的期待が現れているとともに、共同体に規制された投票行動も作用していた。共同体では、個々の有権者の自立した投票行為はみられず、スホートで一体となって支持・投票行動がなされ、家長の家族員や村全体の投票へ与える影響も大きかった。憲法制定議会選挙で示した「憲法制定議会幻想」учрежденческая иллюзияも、「ミール的」投票行動も、大都市や工業都市、軍隊、さらに地方都市とは異なる自律した農民の共同体的文化圏の存在を示唆しているのである²⁴⁾。

郷ゼムストヴォと憲法制定議会の二つの選挙に示された農民の行動様式から、農民蜂起の波及のなかにあつて、農民が共同体の外から地方当局により直接導入される制度、政策には冷淡であつて、これに反発し、あるいはこれを同化しつつ、他方では、共同体を越える中央の国家権力レベルに強い幻想性と受容性をもっていたことがわかる。農民のこの意識における二重性は、ツァーリ信仰以来、共同体農民に伝統的な意識構造の継承でもあつた²⁵⁾。

II. 郷・村のソヴェト権力と共同体

1917年10月末から翌18年3月までペトログラードの武装蜂起に先導されて、県・郡レベルで都市を拠点に各地でソヴェト権力が樹立されていった。他方、農村では、都市の労兵革命に助けられつつ、自立的に農民蜂起が、いわゆるオーギー的状况を伴って進行した¹⁾。農民は地主領の打ち毀し、焼き打ち、記帳などを行いつつ郷村レベルでソヴェト権力を樹立・受容していった。表Iは、中央農業地帯と沿ヴォルガ地帯の三県における地

23) О. Н. Знаменский, Всероссийское Учредительное Собрание, Л., 1976, стр. 257-8, 295-7.

24) 農民は憲法制定議会選挙に際して、各政党の選挙名簿をスホートで選択しそれへの投票を決定していた。従つて、スホートへの参加権をもつ家長の家族員への影響が現れるとともに、選挙での紛争・対立はしばしば、支持政党の異なる村落間のそれとして現象した。см. 《Борьба за установление и упрочение советской власти в Симбирской губернии (март 1917 г. - июнь 1918 г.)》, сборник документов и материалов, Ульяновск, 1957 [以下《Симбирск》と略記] № 104-5; 《Октябрь в Туле》, сборник документов и материалов о борьбе за власть советов в Туле и губернии в 1917 году, Тула, 1957. [以下《Тула》と略記] № 180. ソ連邦の研究では、農民が「立憲的幻想」から醒め、憲法制定議会へ冷淡に対応したと強調され、ポリシェヴィキー支持を示す史料の紹介にとどまり、農民の高い投票率は「ミール的」投票行動で説明される。そして、「ミール的」投票行動は「最も鋭い社会闘争の状況下で急速に消失していった、古い慣習の賜物」と消極的に解釈される。О. Н. Знаменский, указ. соч. стр. 114, 117, 265. だが、1917年秋に革命への不安と危惧のなかで農民が憲法制定議会へ示した期待は依然として強く（《Самара》№ 109）、農民が選挙で示した「ミール的」行動様式は革命期を通じて強く存続した。ともあれ、選挙は政党拘束名簿式で行れ、エス・エルの圧倒的勝利となったが、郷村の共同体世界と選挙結果には大きな乖離が存在したのである。

25) 拙稿「第一次ロシア革命期における農民運動—プリガヴォールの分析を通して—」『土地制度史学』第83号（1979年4月）13~16頁。前掲拙稿、「ロシア農民革命の世界—1917年3~7月—」37~8頁。

1) このオーギー（оргия, orgy）的状况は、都市と農村の商品・貨幣流通の崩壊により、やり場のない農民の社会的エネルギーが、農民蜂起の過程で噴出したものといえる。農村では、穀物供出への

表 I 土地記帳 (проведение учета) の時期区分

県	月資料のある郷数	10月以前	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	1918年春	様々の時期
ペンザ県	118	34	4	14	7	4	8	22	-	19	6
リャザン県	131	16	14	22	24	18	12	5	4	5	11
サラトフ県	44	8	6	14	3	1	1	2	-	9	-
計	293	58	24	50	34	23	21	29	4	33	17

(典拠) С. Л. Макаров, К вопросу о ликвидации помещичьего землевладения (по материалам опросных листов Наркомзема и Мособлискома), сб. ст. «Октябрь и советское крестьянство», М., 1977, стр. 114.

表 II 郷ソヴェトの形成時期区分

県名	資料のある郷数	10月以前	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月以降	総計
ヴォローネシ	111	-	-	3	31	54	21	2	-	111
クールスク	60	5	3	6	25	17	3	1	-	60
オリョール	20	-	1	-	9	8	2	-	-	20
ペンザ	25	1	-	-	1	10	11	3	-	25
リャザン	154	2	-	11	73	42	18	4	4	154
サラトフ	86	6	-	16	32	22	5	4	1	86
タムボフ	135	1	-	1	43	55	31	4	-	135
トゥーラ	138	-	-	9	51	64	9	2	3	138
計	729	15	4	46	264	272	100	20	8	729

(典拠) С. Л. Макаров, К вопросу о ликвидации..., стр. 116.

地主記帳*の時期区分を示している。農民による地主地記帳は、1917年秋から翌18年1月の冬にかけて一つの強い高揚を示し、18年の春3~4月にもう一つのより弱い高揚をみている。前者の地主地記帳の高揚は、1917年秋から始った農民蜂起に先導され、その過程で実施されたものであり、後者は翌18年春の農作業に促迫されつつ実施された。郷ソヴ

抵抗とともに、アルコール飲料の密造と使途のない紙幣が滞留していた。サマラ県ブグリマ郡のコミッサールは、10月2日付の通報で、農民は穀物専売へ敵意を抱いており、「多くの犯罪の原因は、おしゃべりとその他の農民を酔わせる飲料のなせるところである」と地方の社会状況を伝えていた。《Самара》, № 109. スイチェフカ材では、地主邸焼き打ち後、農民は「意識を失うまで酔い痴れた」のである。《1917 год》, стр. 71. 個々の農民騒擾に併発した飲酒などのオーギー的状況は、1917年秋の農民蜂起以来、農村社会を被り観を呈した。シムビルスク県カルスン郡では、カルスン市で11月3日から始った酒蔵や商業施設に対するボグロムが郡部に波及した。これは翌18年2月まで続き、地主所領、酒蔵などが襲われ、酔った農民を押し止めることが出来ず、60の地主所領のうち三つのみが残った。《Симбирск》, № 247. 「ノーヴァヤ・ジーズニ」紙は、このような社会状況をとりえ、農村では日常生活物資の流入停止のなかで、「ブルジュイ буржуй」に対する敵意が示され、老いも若きも女子供も飲酒に耽けり、紙幣による賭博、放蕩、性病とチフスが蔓延し、高価な万能薬と称するものが売られていると指摘し、「乱暴な酔った狂宴 оргия は現在の常態である」と報じていた。《Новая жизнь》, № 39, 10 марта (25 февраля) 1918 г., стр. 4.

* 農民が地主所領におしかけ、地主の土地、農具、家畜などを帳簿に記載する行為をいう。この土地記帳から農民による事実上の土地用益に至るまでの過程を通じて、地主的土地所有は解体された。

ソヴェトの組織化は、この二つの高揚の狭間に大きく進行している。表 II から、郷ソヴェトの組織化は、18年1～2月期に集中し、従って、農民蜂起とそれに続く地主地記帳は、基本的には、村・郷スホートや郷土地委員会によって実施され、18年春の地主地記帳は、郷村ソヴェトとその土地部の影響を受けつつ実施されたと確認できる。

これらの村・郷の共同体世界に樹立されたソヴェト権力は、共同体の内発的な農民の力を結集したというよりは、郷ゼムストヴォの権限を引き継ぎつつ²⁾、県・郡レベルで樹立されたソヴェト権力を受容したもので、共同体外の政治世界と共同体農民を結びつける社会的紐帯として機能した。しかも、この社会的紐帯は、共同体に内在する独自の権力基盤を欠き、都市のソヴェト権力に支援・育成され、郷村の共同世界に容認されてのみ存続できたのである。

共同体でのソヴェト権力の受容は、まず、スホートや農民総会 *общее собрание* でのソヴェト権力承認の決議を採択することから始まっている³⁾。共同体世界でのソヴェト権力の積極的な担い手は、都市的志向をもち農村に帰郷した兵士、出稼ぎ農民が中心であったが⁴⁾、郷村のソヴェト権力は、その選出過程、財政的基盤、土地及び食糧をめぐる活動などにおいて、伝統的で自律的なスチヒーヤ的な政治風土に絶えず同化されていった。1918年4～5月期に行れたヴォローネシ県9郡85郷の郷ソヴェトのアンケート調査から、郷ソヴェトは、スホート、総会で選出されたり、各村からの代表によって構成されたといえる。郷ソヴェトの形成に関して、数百人から一人という代表規準を回答しているのもみられるが、これは、村・郷スホートでの選出体系を否定するのではなく、選出規準を補足したものと解せる。10戸から一人の代表と回答した郷ソヴェトは、明らかに、郷スホートへの選出規準を踏襲しているのである。郷ソヴェト執行委員会のメンバーは、3～7名、村執行委員会は3名を中心に数名から成るのが一般的であったが、数十名から成る執行委員会も存在した。郷スホートで選出され、70名を擁する郷ソヴェト執行委員会は、郷スホードと大きな変化はなかったであろう⁵⁾。さらに、郷ソヴェトは財政的には、共同体の各種の自己課税に大きく依拠していた。収入・資産に応じた累進課税や商業施設への課税の実施、あるいは構想もみられはしたが一般的ではなかった⁶⁾。また、郷ソヴェトの存在す

2) アブラーモフは、1918年4月2日にモスクワ州ソヴェト通信部によって発送された質問表の回答から、975郷でゼムストヴォが自発的に事務を郷ソヴェトへ譲渡し、強制を伴ったのは僅か22件であった、としている。П. Н. Абрамов, Волостное земство, 《Исторические записки》, Т. 69, 1961, стр. 42.

3) 《Нижегород》 № № 352, 373, 384-5, 389, 393, 426, 436; 《Самара》 № № 135-139; 《Симбирск》, № № 101, 139, 140, 160, 166; 《Курск》, № 203, 209; 《Орел》 № 134; 《Борьба за установление и упрочение советской власти в Рязанской губернии》, Рязань, 1957. [以下《Рязань》と略記] № № 134, 140; 《Борьба за советскую власть в Воронежской губернии, 1917-1918 гг.》, сборник документов и материалов, Воронеж, 1957, [以下《Воронеж》と略記] № № 194, 197, 204, 209, 211. 《Татария》, № № 353, 355.

4) ヴィリャチノ村(タムボフ県モルジャンスク郡)では、村ソヴェトのメンバーは、帰村した兵士と鉞夫を中心とする無党派からなっていた。П. И. Кушнер (от. ред.), Село Вирятино в прошлом и настоящем, М., 1958, стр. 122.

5) С. А. Пионтковский (ред.), 《Советы в Октябре》, сборник документов, М., 1928, стр. 364-379.

6) Там же.

表 III 郷における諸党派の組織状況

全アンケート数	1,011 件
{ 回答なし	128 件
{ 回答総数	883 件
郷における諸党派組織の有無	
{ 有	150 件 (17.0%)
{ 無	733 件 (83.0%)
計	883 件 (100%)
{ ボリシエヴィキー	60 件 (6.8%)
{ 左翼エス・エル	10 件 (1.2%)
{ 他 党 派	18 件 (1.2%)
{ 党 派 名 不 明	62 件 (7.0%)
計	150 件 (17.0%)

(典拠) П. Н. Абрамов, Опросный лист волостного совета (1918 г.). 《Исторический архив》, 1960, № 3, стр. 200. このアンケート調査は労兵農ソヴェトモスクワ州執行委員会通信部によってモスクワ州14県へ1918年4月2日に発送されたアンケート用紙に、郷ソヴェトが同年4—6月期に記入したものである。中央農業地帯6県（ヴォローネシ、クールスク、オリョール、リャザン、タムボフ、トゥーラ）、中央工業地帯7県（ヴラジーミル、カルーガ、コストロマ、モスクヴァ、ニジェゴロド、トヴェーリ、ヤロスラヴェリ）、西部地域のスモレンスク県からのアンケート回答1,013件がアブラモフによって解明された。そのうち、ニジェゴロド県の回答2件を除く1,011件が分析されている。これら中央諸県の郷総数2,991郷のうち、1,011郷、即ち、33.8%の郷から回答をえているから、このアンケート調査は全体的把握を可能にしている。

る郷村の共同体においてさえ、政党組織は殆んど欠如していた。ヴォローネシ県の85郷の郷ソヴェトのアンケート回答では、党組織の存在するのは、11郷のみであった⁷⁾。これは、ロシア中央部全体にも該当する。表 III は、1918年4—6月期における郷レヴェルでの党派組織の存在状況を示したものである。アンケートに回答した郷の83%にはどのような党派組織も存在しなかった。党派組織が存在するとした150件の回答のうち、62件がボリシエヴィキー、左翼エス・エルなどの区分をせず、ただ「存在する」と党派組織を明示せずに回答していた⁸⁾。ここには、郷ソヴェトのアンケート回答者のみならず、郷ソヴェト自体が「党派性」意識に内在的に強く拘束されていなかった社会状況が反映している。かくして、月に数回、「必要に応じて」会合し⁹⁾、数名から成る郷村のソヴェト執行委員会、農村共同体の政治風土に絶えず順化され、同化されていかざるを得なかった。

郷村のソヴェトは、その党派構成において、無党派が優越し¹⁰⁾、さらに、そこで現象する「党派性」も、郷村の共同体では、それを培養する党派組織を殆んど欠いていたため、党の綱領・規約を受け入れ、一定の政党組織に帰属し、政治闘争の過程で確定するものではなかった。農民代議員の「党派性」は、強固な基盤を共同体内にもたず、外発的であり

7) 6郷がボリシエヴィキーの、1郷が左翼エス・エルの、1郷が両組織の存在を指摘し、5郷が党派を明記せず、「存在する」とのみ回答していた。 Там же.

8) П. Н. Абрамов, Опросный лист волостного совета ..., стр. 198, 200.

9) С. А. Пионтковский (ред.), Советы в Октябре, стр. 364-379.

10) 1918年6月以前の郷ソヴェトの党派構成は、北部州では、ボリシエヴィキーとその同調者—28%、左翼エス・エルとその同調者—6%、その他党派1%であり、無党派は65%であった。Ф. В. Чебаевский, К вопросу об укреплении местных советов летом и осенью 1918 года. 《Вопросы истории》, 1958, № 8, стр. 37. 中央農業地帯と沿ヴォルガ地帯においても、郷ソヴェトの「無党派」性に変化はなかったといえる。

かつ流動的であった。1918年2月24日から開かれたクルスク県第一回労兵農ソヴェト大会では、代議員の党派構成ではボリシェヴィキーが多数を制していたが、全ての決議がエス・エルの影響を強く反映していた。「明らかに、大会へ到着した代議員は、『ボリシェヴィキー』という言葉が農民の間で非常に通用しているので、自らを『ボリシェヴィキー』と呼んでいるだけであった。彼らにとって現実的な成果である土地の獲得などが、その言葉と結びつけていたが、ボリシェヴィキー党の綱領も、規約も彼らは会得していなかった」のである¹¹⁾。農民は共同体の政治風土のなかで、階級的視点ではなく、「全農民的」判断にとらえられ、「党派性」によってではなく、「善行」などの共同体的な伝統的倫理観によって、ソヴェト権力の代表を選出したのである¹²⁾。郷村のソヴェトは、自らに付設した土地部、食糧部の活動を通してさらに、郷村共同体の政治風土に順化するにつれ、県郡レベルの都市を拠点とするソヴェト権力から「クラーク」の影響を強く受けていると非難されるに至る。シムビルスク県カルスン郡では、郷村ソヴェトが3月以降、急速に組織され活動を始めたが、郡ソヴェト権力は、「〔郷村の〕ソヴェトは殆んど全てクラーク的であり、全ての処置と指令はこれらのソヴェトによって全く信望を失墜させられている。これらのソヴェトのいくつかは、穀物輸送貨物の破壊や所領の分割さえ指導した」と論難していた¹³⁾。タムボフ県キルサノフ郡では、郷ソヴェトの活動は、「実際には、単に個々の人物だけでなく、ところによっては、ソヴェト全体が任務に適わず、自からの誤った行動でむしろ損害をもたらした」と総括されている¹⁴⁾。第二ヂャコヴォ村（クルスク県クルスク郡）のソヴェト執行委員会議長が「当地のクラーク・富者の走狗であり、彼らの笛に踊り、彼らの望みを全て実行している」と非難され、「読み書きのできる、誠実な党活動家」に議長を替えることが要求される時¹⁵⁾、文盲が圧倒的で無党派的な共同体世界に順化されたソヴェト権力がみてとれる。

このようにして、共同体の外から受容し樹立された郷村のソヴェト権力は、より強力で自律的な農民の共同体世界に順化され、同化されていったが、18年の夏以降、ソヴェト権力が穀物徴発に積極的にのり出すと、大きな危機に陥った。都市と農村の社会的紐帯としての郷村ソヴェトは、二つの世界によって引き裂かれ、その解散と追放が頻発することになる。とりわけ、中央農業地帯と沿ヴォルガ地帯において、「クラーク」の掌握する郷村ソヴェトの改選と貧農委員会による権力代替化が広範に行れた¹⁶⁾。タムボフ県では、モルシャン、リペツク、スパスク、ウスマンなどの一連の郡で、「クラーク的ソヴェト」が解散され、「プロレタリア的」ソヴェトが創設されさえした¹⁷⁾。この都市から農村への圧

11) 《Курск в революции》, сборник материалов по истории Октябрьской революции в Курском уезде. 1917-1918 гг. 1927, Курск, стр. 53.

12) П. Н. Абрамов, Волостное земство ..., стр. 43.

13) 《Симбирск》, № 247.

14) 《Борьба рабочих и крестьян под руководством большевистской партии за установление и упрочение советской власти в Тамбовской губернии (1917-1918 годы)》, сборник документов, Тамбов, 1957 [以下《Тамбов》と略記] № 167.

15) 《Курск》, № 457.

16) Ф. В. Чебаевский, К вопросу об укреплении ..., стр. 35-8; 《Курск》, № № 453, 476, 482; 《Симбирск》, № 247; 《Тамбов》, № 137.

17) 《Тамбов》, № 137.

力に対して、反対の方向、即ち、郷村共同体の側からも強い反発と抵抗がみられた。ペンザ県の農民代表は、1919年初め、クレムリンでレーニンに陳情している。農民は三ヶ月前に選出したソヴェト代表が、パンと小麦粉を記帳し、罰金を科し、農民のものを持ち去り、「我々を抑圧するようになった」と訴え、彼らはかつて馬泥棒や詐欺師であり、前科者であったと指摘した。そのような人物をソヴェト権力の代表者として選んだ理由を農民は次のように説明した。「さて、あなたに本当のことを話そう、我々は自分達の政府をもてるとは信じていなかった、それは長く続かず、何らかの部隊がやって来てことごとく追い散らされ、〔村の〕役人といえ、彼らはまっ先に捕えられ監獄に入れられるだろうと我々は考えた。……（中略）……従って、これらの囚人、馬泥棒は監禁されるのに慣れており、そしてさほど気にかけないであろうが、我々、我々農民は、そのようなことにはふさわしくない……（中略）……それなのに、逆に彼らは権力をとり、我々を抑圧し始めた、抑圧、抑圧し始めたのです。」¹⁸⁾ここにみられるソヴェト権力と農民の関係からは、ソヴェト権力の担い手に共同体農民にとって異質な外在的な人物を据えることにより、自らの共同体の自立性を擁護しようとした共同体農民の、ソヴェト権力に対する強い不信と抵抗を読み取ることができる。一連の地域で、農民はさらに進んで、郷村ソヴェト、貧農委員会、食糧部隊を解散し、共同体世界から追放し、赤軍部隊と衝突するに至ったのである¹⁹⁾。

III. 「総割替」(1918年春～秋)

共同体世界でのソヴェト権力の受容・樹立に続いて、あるいは並行して、春から共同体機構に依拠した農民の土地割替が進行していった。三圃制下の農作業リズムに合わせて、4～6月期に春播き夏畑、草地、草刈場が、6～8月期に休閑地（秋播き冬畑用）が分割・割替され、最後に冬畑であるライ麦畑の刈取り後の畑地 ржища（翌年の春播き夏畑用）の割替が、9～10月期に行われた。ライ麦取り入れ後の畑地は、三圃制下の家畜共同放牧のため、翌春の農作業直前に割替えられるのが通例であったが、農地をめぐる土地割替は、これをもって一応、基本的に終了した¹⁾。1918年の土地割替は、地主地、各種の農民私有地、農村富裕農の土地を呑みこみ、「総割替」となり自立的に進行した。その土地分与規準、実施時期などは、各地域、各共同体で多様であったが、当時のインテリにとっては、彼らの期待を裏切る「スチヒーヤ」の発現であり、またボリシェヴィキーの農業政策と対抗するものと認識された²⁾。この土地割替の土地制度史的な一般的研究はすでになさ

18) T. Deutscher (ed.), *Not by Politics Alone ... The Other Lenin*, London, 1973, pp. 227-230.

19) П. Крошицкий и С. Соколов (сост.), *Хроника революционных событий Тамбовской губернии*, Тамбов, 1927, стр. 62-71.

1) Е. А. Луцкий, *Передел земли весной 1918 года*, 《Известия Академии Наук СССР》, серия истории и философии, Т. V. № 3 (1949), стр. 239, 241; В. Р. Герасимюк, *Уравнительное распределение земель в Европейской части российской федерации в 1918 г.* 《История СССР》, 1965, № 1, стр. 96.

2) Z. 氏は、十月革命について「真のスチヒーヤの革命が農村でも起こり、農民によって成就され、それは土地割替をもって完了した」とし、彼の「革命の土地仮説」に従って、1917年11月～18年5月を「革命スチヒーヤの分娩期」としていた。Z., *К познанию происшедшего*, 《Русская мысль》, 1923, кн. IV-V, стр. 234-7, 241. В. ルードネフは、Б. ブルクスの、1918-21年に

れている³⁾。ここでは、「スチヒーヤ」の発現過程とその担い手をプリズナチェンスコエ村団における土地割替の具体例に即しつつ、共同体内の土地＝家族関係からみた諸グループの対抗のなかで明らかにしたい。基本的史料としては、1918年2月3日に軍隊から故郷の村に帰り、村スホート、共同体の土地割替に積極的に参加した、村ソヴェトの土地部書記、Я. サドフスキーの回想手記を利用する⁴⁾。

プリズナチェンスコエ村団はクルスク県コロチャ郡のセイム川上流に位置し、9つの部落(хутор)、7つの組(сотня)から成り、総戸数231戸、1,388人を擁する大ロシア人の村団 сельское общество であった。隣りの小ロシア人のグシコフスコエ村団と一つの教会と学校を共用し、村 село を成していた⁵⁾。当村団では、3月2日から、村スホートで選出された土地部議長、書記、さらに村団の各組を代表する二人の測地人 мерщик から構成される土地部が、家屋地 усадьба*、夏畑、休閒地、ライ麦刈取畑 ржища の分割・割替に取りかかった。表IVは、家屋地の切り取り・均等化に抵抗した農戸の家族構成と経営内容を示したものである。この表から家屋地の均等化に抵抗した農民は、四つのグループに分類できる。第一に、А. Ф. Маматов 家、Ф. И. Маматов (Симонов) 家、Н. Н. Немыкин-Собакин 家、М. С. Доманов 家、И. И. Кулабухов 家などの大家族富裕農層である。第二に、И. М. Маматов (Оболонков) 家、Г. Г. Немыкин-Моркин 家、В. И. Лавринов 家、などの小家族勤労経営タイプが指摘できる。第一の社会グループがロシア農村、とりわけ黒土地帯において根強く残存する伝統的富裕農タイプとすれば⁶⁾、第二のそれは、新たに形成された勤労小家族の富裕農といえる。第三に、Ф. И. Симонов 家、А. Ф. Маматов 家などのフートル、オートルプなどの区画私有地で経営を行うグループが挙げられる。Ф. И. Симонов 家は村の家屋地には住まず、それを貸し出し、自分の畑地に大きな家屋地

「ロシアの国民経済は岸から押しよせた共同体スチヒーヤに、総割替のスチヒーヤによって呑み込まれた」という主張を受け継ぎ次のように、農民スチヒーヤを把握している。「その際、後にポリシエヴィキーの土地布告において歪曲されたナロードニキ的綱領の影響や作用の下ではなく、全く自立的に、それ自身内在的で有機的な諸動因に導かれて作動した。1918-1921年の均等割替において、消滅したと思われる何か数世紀来の共同体の慣習が具現し、忘れ去られたと思えた農村の歴史的な記憶が蘇った。」В. Руднев, Около земли., 《Современные записки》, 1924, XVIII, стр. 365.

3) 1917-18年の土地変革の全体的把握は、日本では、すでに荒田氏の論文に詳しい。荒田洋「農村における変革過程—1917-18年の土地改革—」(江口朴郎編『ロシア革命の研究』1968年、所収)しかし、荒田氏が、土地変革を「国有化」とし、農民を「小商品生産者」として把握する方法は、ソヴェト政権の側からの土地変革への働きかけを過大視する傾向と結びついて、変革期における共同体の問題を看過しているといえる。

4) Яков Садовский, Как я делил землю, 《Русская мысль》, 1923 кн. IX-XII. стр. 321, 331, 353.

5) Там же, стр. 321, 332-3.

6) 農村では、1880年代から農民の出稼ぎが盛んになるとともに分家が進行したが、大家族はその農業経営上の様々な利点から、富裕な層として根強く残存していた。П. И. Кушнер (от. ред.), Село Вирятино ..., стр. 75-6. А. М. Анфимов, П. Н. Зырянов, Некоторые черты эволюции русской крестьянской общины в пореформенный период (1861-1914 гг.), 《История СССР》, 1980, № 4, стр. 33-35.

* 農民の усадьба には家屋・農業施設が建てられ、それに付属して野菜、麻、牧草などの作物が栽培され、果樹をはじめ各種の樹木が植えられ、蜂房や堰が設けられていた。この土地空間は、共同体の耕作強制から相対的に隔離され、農民の経営的創意に任され、慣習的に割替を受けず世襲相続が認められていた。усадьба をここでは「家屋地」と訳出して使用する。

表 IV プリズナチェンスコエ村団において家屋地の均等化に抵抗した農戸

家 族 名	家 族 構 成	経 営 内 容
A. F. Mamatov (第一組 sotnya)	家族員数 26 名: 6 人の息子, 内 4 人は妻帯し, 成人した息 子がいる。	4 つの《不在》家屋地, 数片の鉤状家屋地 клетки, 購入家屋地, 世襲家屋地あわせて, 7 d. をもつ。オートルブ経営を行い, オート ルブの角ごとに国章のついた境界柱を立てて いた。家屋地には, 樺, 柳, 果樹が植えら れ, 堰もあり, 最も肥沃な土地であった。
I. M. Mamatov (Obolonkov) (第一組)	家族員数 3 名: 本人, 妻, 母	世襲家屋地 1 d. 20 サージエンをもつ。素晴 らしい野菜畑, 麻畑と園 сад がある。家屋 地分与規準によれば, 15 サージエンのみが残 され, あとは切り取られることになる。
F. I. Mamatov (Simonov) (第二組)	家族員数 19 名	大きな盆地 лог (30×30 サージエン) があ り, そこには二つの麻洗い場 копанец, があり, 柳がはえており, 30 本のりんごの木が 植えてあった。
G. G. Nemykin- Morkin (第二組)	家族員数 3 名 (推定): 本人 (55 歳), 妻, 養子にもらった 娘 (15 歳)	二つの家屋地 3 d. と畑地 4 分与地 надел を離村農民より購入していた。「蜜蜂のよう に働く」勤労農民。
N. N. Nemykin- Sobakin (第二組)	家族員数 24 名: 4 人の息子, 1 人は戦死し妻と赤子を残 す, 長男には 7 人の子供が いた。	二つの購入家屋地と 35 d. の購入地をもつ。 家屋地には, みざくらの桜の園があった。二 つの購入家屋地は《不在》家屋地として切り 取られた。
M. S. Domanov (第五組)	家族員数 12 名: 主人は 70 歳 の老人	12.5 d. の種々の由来の家屋地をもつ。こ こには二つの園があり, 夏には蜂房が置かれ, 堰と麻洗い場があり, すみには白樺の苗床が あった。
I. I. Kulabukhov (第五組)	家族員数 14 名: 妻帯して いる 3 人の息子とその子供達	3 d. の世襲家屋地と 3.5 d. の購入家屋地を もつ。そこには樺, 白樺, 楓がはえており, 果樹園もあった。購入家屋地には立派な建物 があった。
S. A. Mamatov (第五組)	家族員数, 不明	二つの大きな購入家屋地 4.5 d. をもつ。
A. S. Mamatov (第六組)	家族員数, 不明	6 d. の購入家屋地と 32 d. の購入畑地をも つ。
Molchanov 家 長兄 Stefan, D. M. 弟 Pavel, D. M. 弟 Vasilij, D. M.	家族員数 9 名 家族員数 3 名 家族員数 2 名	長兄は貧しく, 息子たちとの喧嘩が絶えず, いつも飲んだくれていた。弟二人はともに小 家族で富裕に зажиточный 暮していた。
V. I. Lavrinov (第四組)	家族員数 6 名	2.5 d. の家屋地をもち, うち, 2 d. は素晴 らしい園であった。園には, 野菜とあわがえ り(牧草)が植えられていた。32 d. の購入地 ももつ。
F. I. Simonov (第四組)	家族員数不明	村の家屋地に住まず, それを貸し出し, 自分 の畑のなかに大きな家屋地をつくり, 完全な フートル経営を行い, 年とともに富裕になっ ていた。
Nikita Besedin (第七組)	家族員数 6 名 (推定): 本人, 妻, 母, 姉妹	戦前に 3 ヶ年, 戦時に 3 年半, 軍務に服する。 戦時中に彼の経営は零落する。3 d. の家屋地 のかわりに, 1 d. の家屋地と 10 サージエン (1/3 d) の畑地への切り替えが行れた。

(典拠) Я. Садовский, Как я делил..., стр. 333-344. なお家屋地の切取りに抵抗した農民がほかに
もいたが, サドフスキーの資料に姓名などが明記されていない場合は, この表から除外した。

を造り、完全なフートル経営を行い、年毎に富裕化していた。А. Ф. Маматов 家は、第一の大家族富裕農層にも分類されるが、同時にオートルプの角ごとに国章のついた境界標を立て、オートルプ経営を行っていた。これらの区画地所有グループは、現実には、第一、第二の社会グループと重複しうるが、理論的には区別すべきであろう。第一、第二の社会グループはストルイピン農業政策に支えられて、第三のそれへ移行することにより、共同体のなかに、区画私有地に立脚した強固な経営基盤をもち、富裕農化しえたからである。以上の三つの富裕なグループの他に、家屋地の切取り、均等化に抵抗した第四の、戦時零落農グループが存在した。Н. Беседин 家は、本人と妻、母、姉妹から成り、本人が軍隊へ召集されている間に、彼の農業経営は零落していた。ベセーヂン家の3デシャーチーナ（以下 d. と略記）の家屋地は、10 サージェン (1/3 d.) を畑地に編入し、1 d. を残し、他は切り取られた。この戦時に男子労働力を奪われ、経営危機に瀕した農民層が、戦時中の割替とオートルプ、フートルの形成に強く抵抗した層であり、軍隊から故郷農村への兵士の帰村を絶えず促した要因であった⁷⁾。表 IV から、以上四つの社会グループに明示的に分類できない С. А. Маматов 家、А. С. Маматов 家も、その家屋地の規模から、先の富裕農グループに属すると推定できる。

プリズナチェンスコエ村団では、家屋地に続いて春播き夏畑、休閒地（秋播き冬畑用）の割替が「旦那」の土地、村はずれの「縁」にある農民私有地も含めて行われた。まず畑地の等級を定め、全ての等級の畑地を各農戸がわずかでも受けとるように配慮され、「籤で」по жеребьям 各組に畑地が割り当てられ、続いて各組の測地人の指導の下で、各農戸への土地分与が行れた。七月初めには、遅ればせながら、割り当てられた「旦那の」草地を村団全員で刈り取り、最後にライ麦刈取り畑（翌年の春播き夏畑用）を割替して、当村団の1918年の割替は完了した⁸⁾。結局、表 V にみられるごとく、口数に応じて、18区画 загон に1人当り計23 サージェンの土地が割替分与され、家屋地と畑地に関して、ほぼ均等な土地用益が達成された。

プリズナチェンスコエ村団のあるクルスク県全体で、1918年の総割替によって生じた農村の社会的変動を概観すると次のようになる。表 VI-1 から、クルスク県全体で、播種地なし、1 d. 未満の下層と播種地 10 d. 以上の上層が、それぞれ激減し、播種地 2-6 d. を有する農民層が、絶対的にも相対的にも増大し、全体の 1/3 を成すに至った。表 VI-2 からは、役馬なし層と役馬3頭以上持ち層が激減し、役馬1頭持ちが62%、役馬2頭持ちが17%を占め、農村の圧倒的多数を成すに至っている。表 VI-3 からは、家族員数11名以上の大家族層が激減し、家族員数2-6名の農民層が、相対的にも絶対的にも増大し、過半をなすに至ったことが判明する。以上のことから、クルスク県では、播種地 2-6 d.、役馬1-2頭持ち、家族員数2-6名の農民経営が、1918年の割替を経て圧倒的多数をな

7) А. М. Анфимов (ред.), Крестьянское движение в России в годы первой мировой войны, июль 1914 г. - февраль 1917 г. сборник документов, М.-Л., 1965, стр. 19-20, док. № № 14-18, 28-30, 48, 70-71, 73, 85, 99-100, 108-110, 117, 132-4, 136, 138, 146, 148-9, 158-9, 161, 163, 169, 201, 212, 247, прим. 138; Е. И. Чернышев, Из истории крестьянских движений в Казанском крае в 1917 году. Казань, 1926, стр. 23-5, 28, 39, 40-42.

8) Яков Садовокий, указ. статья, стр. 352-4.

表 V プリズナチェンスコエ村団の土地割替 (1918年)

家屋地 <i>усадебная земля</i>	1人当り	5 サージェン*	1 区画 (загон)
夏 畑	1人当り	6 $\frac{1}{2}$ サージェン	6 区画
休閒地 (冬畑用)	1人当り	6 サージェン	5 区画
冬畑刈取り畑 (翌年夏畑用)	1人当り	5 $\frac{1}{2}$ サージェン	6 区画
計	1人当り	23 サージェン	18 区画

(典拠) Я. Садовский, указ. статья, стр. 351-4.

* サージェンは長さの単位であるが、プリズナチェンスコエ村団では、1サージェン = $\frac{1}{30}$ デジャチャーナで換算されている。

表 VI-2 クルスク県農民経営における役馬頭数別農戸の変化

役馬頭数	1917年		1919年		増 減	
	頭数	%	頭数	%	増	減
0頭	2,027	30.0%	1,577	19.3%	- 450	- 22.2%
1頭	2,462	36.4	5,090	62.1	+ 2,625	+ 106.7
2頭	1,614	23.9	1,354	16.5	- 260	- 16.1
3頭	440	6.5	140	1.7	- 300	- 68.2
4頭	133	2.0	23	0.3	- 110	- 82.7
5頭以上	82	1.2	5	0.1	- 77	- 93.9
計	6,758	100	8,189	100	+ 1,431	+ 21.2

(典拠) Труды ЦСУ, Т. VI, вып. 3, «Экономическое расслоение крестьянства в 1917 и 1919 г.», М., 1922, стр. 9, 18.

表 VI-3 クルスク県における家族員数の変化

家族員数	1917年		1919年		増 減	
	人数	%	人数	%	増	減
1名	125	1.9%	166	2.0%	+ 41	+ 32.8%
2~3名	685	10.1	1,571	19.2	+ 886	+ 129.3
4~6名	2,305	34.1	3,269	39.9	+ 967	+ 42.0
7~10名	2,708	40.1	2,655	32.4	- 53	- 2.0
11名以上	935	13.8	528	6.5	- 407	- 43.5
計	6,758	100	8,189	100	+ 1,431	+ 21.2

(典拠) Труды ЦСУ, т. VI, вып. 3, «Экономическое расслоение крестьянства в 1917 и 1919 г.». М., 1922, стр. 8, 18.

すに至ったといえる。この平準化傾向は、中央農業地帯と沿ヴォルガ地帯の農村一般にも該当する⁹⁾。

この平準化傾向を、家族員数と播種面積の相関において、より具体的にみたのが表 VI-4 である。播種地なしと播種地 16 d. 以上では、家族員数に関りなく全ての農戸数が激減あるいは潰滅している。播種地 1 d. 未満では、家族員数 1 名へ、播種地 1-2 d. では、

9) «Экономическое расслоение крестьянства в 1917 и 1919 г.», М., 1923, стр. 2-11, 20-21.

表 VI-1 県別の播種面積による農民経営数の変化 (1917~1919年)

県名	年度	分類された経営総数	播種地なし	0~1 dec	1~2 dec	2~4 dec	4~6 dec	6~8 dec	8~10 dec	10~16 dec	16~25 dec	25 dec以上	%
カザン県	1917	37,372	(11.41) 4,265	(5.33) 1,991	(18.75) 7,008	(30.18) 11,280	(17.56) 6,561	(8.55) 3,194	(4.20) 1,569	(3.43) 1,282	(0.49) 184	(0.10) 38	100
	1919	39,052	(3.75) 1,463	(9.44) 3,687	(22.79) 8,900	(37.86) 14,784	(16.93) 6,613	(6.19) 2,416	(2.12) 828	(0.90) 355	(0.01) 4	(0.01) 2	100
クルスク県	1917	6,758	(7.04) 476	(7.77) 525	(11.10) 750	(20.60) 1,392	(17.95) 1,213	(12.78) 864	(8.17) 552	(9.96) 673	(3.61) 244	(1.02) 69	100
	1919	8,189	(1.44) 118	(3.12) 256	(10.82) 886	(37.72) 3,089	(28.38) 2,324	(12.74) 1,043	(4.14) 339	(1.60) 131	(0.04) 3	(0.00) -	100
ペンザ県	1917	27,946	(7.72) 2,157	(9.67) 2,702	(13.54) 3,783	(26.64) 7,445	(17.60) 4,919	(10.49) 2,932	(6.16) 1,721	(6.24) 1,743	(1.60) 449	(0.34) 95	100
	1919	29,875	(3.80) 1,134	(8.69) 2,596	(15.90) 4,750	(35.19) 10,514	(21.39) 6,389	(9.53) 2,846	(3.69) 1,104	(1.74) 521	(0.07) 21	-	100
リヤザン県	1917	25,745	(10.45) 2,690	(15.31) 3,942	(22.26) 5,730	(26.50) 6,823	(12.51) 3,221	(6.21) 1,598	(2.99) 771	(2.95) 760	(0.70) 180	(0.12) 30	100
	1919	30,510	(4.98) 1,519	(19.57) 5,971	(24.90) 7,598	(31.02) 9,463	(13.22) 4,033	(4.33) 1,320	(1.38) 421	(0.56) 172	(0.04) 13	-	100
サラトフ県	1917	24,310	(13.25) 3,222	(4.92) 1,195	(10.06) 2,445	(18.56) 4,512	(15.52) 3,774	(12.09) 2,938	(8.26) 2,009	(12.21) 2,968	(4.04) 982	(1.09) 264	100
	1919	26,632	(8.25) 2,196	(5.48) 1,460	(11.35) 3,022	(26.43) 7,039	(21.00) 5,593	(14.14) 3,767	(7.25) 1,932	(5.54) 1,474	(0.54) 143	(0.02) 6	100
タムボーフ県	1917	16,946	(6.92) 1,172	(10.31) 1,748	(20.78) 3,521	(29.68) 5,029	(15.58) 2,640	(7.52) 1,275	(3.81) 646	(4.05) 686	(1.03) 175	(0.32) 54	100
	1919	19,771	(0.61) 121	(10.62) 2,099	(27.28) 5,393	(37.25) 7,365	(16.69) 3,299	(5.54) 1,095	(1.42) 281	(0.58) 115	(0.01) 3	-	100

(典拠) Труды ЦСУ, Т. VI, вып. 3, «Экономическое расслоение крестьянства в 1917 и 1919 г.», М., 1922, стр. 2-8, 21.

() 内の数字は百分率を示す。

ロシア革命と農民—共同体における“スチヒーヤ”の問題によせて—

表 VI-4 クルスク県農民経営の播種地別、家族員数別の 1917~1919 年間の変化

年度 家族員数	播種地なし農民				年度 家族員数	播種地 2~4 デシャチーナ			
	1917年	1919年	増	減		1917年	1919年	増	減
1人	43 (9.0)	23 (19.5)	-	20	1人	13 (0.9)	9 (0.3)	-	4
2~3人	114 (23.9)	40 (33.9)	-	74	2~3人	172 (12.4)	783 (25.3)	+	611
4~6人	203 (42.7)	39 (33.0)	-	164	4~6人	593 (42.6)	1,834 (59.4)	+	1,241
7~10人	105 (22.1)	14 (11.9)	-	91	7~10人	534 (38.4)	452 (14.6)	-	82
11人以上	11 (2.3)	2 (1.7)	-	9	11人以上	80 (5.7)	11 (0.4)	-	69
計	476 (100)	118 (100)	-	358	計	1,392 (100)	3,089 (100)	+	1,697

年度 家族員数	播種地 0~1 デシャチーナ				年度 家族員数	播種地 4~6 デシャチーナ			
	1917年	1919年	増	減		1917年	1919年	増	減
1人	31 (5.9)	93 (36.3)	+	62	1人	4 (0.3)	1 (0.0)	-	3
2~3人	114 (21.7)	106 (41.4)	-	8	2~3人	92 (7.6)	19 (0.8)	-	73
4~6人	219 (41.7)	40 (15.6)	-	179	4~6人	440 (36.3)	1,006 (43.3)	+	566
7~10人	145 (27.6)	15 (5.9)	-	130	7~10人	558 (46.0)	1,190 (51.2)	+	448
11人以上	16 (3.1)	2 (0.8)	-	14	11人以上	119 (9.8)	108 (4.7)	-	11
計	525 (100)	256 (100)	-	269	計	1,213 (100)	2,324 (100)	+	1,111

年度 家族員数	播種地 1~2 デシャチーナ				年度 家族員数	播種地 6~8 デシャチーナ			
	1917年	1919年	増	減		1917年	1919年	増	減
1人	28 (3.7)	40 (4.5)	+	12	1人	3 (0.3)	0 (0)	-	3
2~3人	132 (17.6)	623 (70.3)	+	491	2~3人	22 (3.7)	0 (0)	-	32
4~6人	352 (46.9)	210 (23.7)	-	142	4~6人	246 (28.5)	13 (1.4)	-	233
7~10人	219 (29.2)	12 (1.4)	-	207	7~10人	445 (51.5)	735 (80.0)	+	290
11人以上	19 (2.6)	1 (0.1)	-	18	11人以上	138 (16.0)	171 (18.6)	+	33
計	750 (100)	886 (100)	+	136	計	864 (100)	919* (100)	+	55

年度	播種地 8~10 デシャチーナ				年度	播種地 11~25 デシャチーナ			
	1917年	1919年	増	減		1917年	1919年	増	減
家族員数					家族員数				
1人	1 (0.2)	0 (0)	-	1	1人	0 (0)	0 (0)	-	0
2~3人	18 (3.3)	0 (0)	-	18	2~3人	3 (1.2)	0 (0)	-	3
4~6人	104 (18.8)	3 (0.9)	-	101	4~6人	23 (9.4)	0 (0)	-	23
7~10人	293 (53.1)	227 (66.9)	-	66	7~10人	96 (39.4)	0 (0)	-	96
11人以上	136 (24.6)	109 (32.2)	-	27	11人以上	122 (50.0)	3 (100)	-	119
計	552 (100)	339 (100)	-	213	計	244 (100)	3 (100)	-	241

年度	播種地 10~11 デシャチーナ				年度	播種地 25 デシャチーナ以上			
	1917年	1919年	増	減		1917年	1919年	増	減
家族員数					家族員数				
1人	2 (0.3)	0 (0)	-	2	1人	0 (0)	0 (0)		0
2~3人	8 (1.2)	0 (0)	-	8	2~3人	0 (0)	0 (0)		0
4~6人	123 (18.3)	0 (0)	-	123	4~6人	2 (2.9)	0 (0)	-	2
7~10人	298 (44.3)	10 (7.6)	-	288	7~10人	15 (21.7)	0 (0)	-	15
11人以上	242 (35.9)	12 (92.4)	-	121	11人以上	52 (75.4)	0 (0)	-	52
計	673 (100)	131 (100)	-	542	計	69 (100)	0 (0)	-	69

(典拠) Труды центрального статистического управления. Том VI, вып. 3., «Экономическое расслоение крестьянства в 1917 и 1919 г.» М., 1922, стр. 2-8.

* クルスク県の1919年度の播種地6~8デシャチーナの調査農戸数は1,043戸であるので(表VI-1参照), 実数とあわない。()内の数字は百分率を示す。

家族員数2~3名へ、播種地2-4 d. では、家族員数2~3名を含め4~6名へ、播種地4-6 d. では、家族員数4~10名へ、播種地6-8 d. では、家族員数7~10名へ、播種地8-10 d. では、家族員数11名以上を含め7~10人へ、播種地10-16 d. では、家族員数11名以上へ、とそれぞれの家族員数に応じた播種面積への集中・肥大化が進行した。この家族員数・播種面積規準から逸脱する社会層は、割替のなかで、切り取りや切り足しを受け、その規準に向けて減少した。家族員数に比して播種地の相対的に大きい層、とりわけ小家族富裕農と大家族富裕農は、割替の過程で減少した。播種地8-10 d. では、家族員数4~6名、播種地10-16 d. では、家族員数4~10名の農民層が激減しているのである。また、1917年には存在していた播種地10 d. 以上で家族員数11名以上の大家族富裕農層も潰滅的に減少した。これは、プリズナチェンスコエ村団では、家屋地の切り取りに抵抗した第一、第二の社会グループに該当するであろう。第三のフートル・オートルブ経営を行

う農民は、この家族員数・播種面積規準からの逸脱よりも、経営形態の側面から、割替への抵抗を把えるべきであろう。第四の戦時零落農民もまた、現存家族員数＝構成に基づく経営能力に比して、この規準を上回る家屋地と畑地をもつものとして切り取りをうけたといえる¹⁰⁾。他方、家族員数に比して播種地の少ない農民、播種地なし農、播種地 1 d. 未満層も、土地を得て減少した。表 VI-4 から、播種地 1 d. 未満では、家族員数 4～6 名、播種地 1-2 d. では、家族員数 7～10 名、播種地 2-4 d. では、家族員数 7 名以上がそれぞれ激滅していることがわかる。プリズナチェンスコエ村団では、С. Д. Молчанов 家と М. В. Шляхов 家がこれに該当する。前者は家族員数が 9 名であり、息子との喧嘩が絶えず、いつも飲んだくれている貧しい農民であったが、兄弟均等相続の慣習法を破って、富裕な小家族経営の弟から家屋地を切り取っている¹¹⁾。後者は、4 人の妻帯した農夫を含む 19 人から成る大家族であり、亜麻畑はみすぼらしく、村では怠惰で知られ、割替の始まる一ヶ月程前に馬を盗まれる有様であったが、「蜜蜂のように働く」勤労小家族経営の Г. Г. Немыкин-Моркин 家の切り取られた家屋地を引き取っている¹²⁾。

1918 年の総割替を経て、播種地 2-6 d., 役馬 1～2 頭持ち、家族員数 2～6 名の農民経営への平準化傾向が生れたが、この平準化傾向を貫徹していたのは、家族員数と播種面積の相関からなる規準であった。この家族員数・播種面積規準の実施を求め、富裕農、フートル農、オートルプ農、戦時零落農などから家屋地や畑地を割替・切取りつつ、共同体において農民経営の平準化を促進した主体は、家父長的家族から自立した経営を志向する若者層であった。彼らは、革命期に絶えず分家を促進しつつ¹³⁾、家族員数・播種面積規準の実現を迫った。プリズナチェンスコエ村団では、彼らは「より若く、より貧しい」農民であり、自らを「貧しき者」худой と呼び、「夫婦当り」на венец の家屋地分与を長老層 старики と大家族農層に対して求める若い農民層であった¹⁴⁾。帝政ロシアにおいて資本制生産様式に包摂され屈折しつつも進展してきた農民層分解は、ロシア革命期の割替を通じて、小家族共同体農民を絶えず肥大化させていく農民層分解へ転換した。このように、共同体での割替を通じて絶えず、小家族農民の均等な土地用益の達成をめず平準化傾向の下では、農民に明確な階級意識は形成されず、共同体意識が自生的に醸成されていくことになる。サドフスキーは、割替における共同体的傾向と所有者的傾向の対抗関係を確認し

10) チェルヌイショーフは、1917 年の土地割替に「強者で飽食した者」による戦時零落農民への攻撃を鋭く読みとっている。Е. И. Чернышев, указ. соч., стр. 23-9, 41-2. しかし、戦時における家族構成の変化、とりわけ、労働力構成が質的に低下した家族に対する共同体農民の土地取り上げの動きを、富裕なクラーク分子によるものとするのは一面的である。

11) モルチャーノフ家は 2 年程前に父の死亡により、三人の息子兄弟が家屋地を均等に分割相続し分家した。第二人は家族員が、それぞれ、2 名と 3 名で裕福に暮しており、兄の「新しい法だ、全ての者を平等にせよ」という論拠に対して、「古習により по старине」「昔からの法 закон изстари」に依り、兄弟均等相続の正当性を主張し抵抗していた。変革期に慣習法を破って「口数に応じて」平等を達成した兄にみられるごとく、ここには、伝統的共同体における革新の契機を読みとれる。Я. Садовский, указ. статья, стр. 342.

12) Там же, стр. 337.

13) 分家は 1917-20 年にピークに達し、大家族富裕農で最も顕著に進行した。T. Shanin, *The Awkward Class. Political Sociology of Peasantry in a Developing Society, Russia 1910-1925*. Oxford, 1972, pp. 157-9.

14) Я. Садовский, указ. статья, стр. 324-6.

つつ、そのスチヒーヤ的性格を次のように指摘していた。「割替の時には共同体が勝利した。《口数に応じて全ての者を平等にせよ》である。個人的な貪婪に対する何らかの抑制を欠いたところで、それと結びついて共同体は勝利した。これは何かスチヒーヤ的なものであった」¹⁵⁾「スチヒーヤ」として意識された1918年の「総割替」は、とりも直さず、共同体での土地＝家族関係における諸グループの対抗過程を通じて発現した共同体農民の自律的かつ自立的な行動性であった。それは、伝統的に継承されてきた共同体の割替機能に依拠していたという点で自律的であり、県郡レベルのソヴェト権力から自立した共同体世界で達成されたという点で自立的であり、変革期農民の共同体を場として発現する「自然力」にも似た押しとどめ難い社会的力であったのである。

IV. 共同体における「政治」

1917～18年のロシア革命において、農民は伝統的な共同体機構に依拠して、農民革命の実現に向った。この農民革命における土地変革については、共同体の伝統的な土地割替を通じて実現されたことが、研究史上明らかにされて既に久しい。ここでは、革命期農民の共同体における自律した政治風土を、スホートに結集する農民と彼らの社会意識の分析によって明らかにしたい。

共同体集会としてのスホート **сход** は、大きな社会組織の代表者が乗物を利用して会集する大会 **съезд** ^{シエスト} とは区別される、徒歩で集合する小集団の直接的な集会を意味していた。このシエストとスホートの相異は、馬に騎乗する人々や乗物にのる人々の文化と徒歩で集る農民の文化の異質性を、さらには、帝政ロシアの伝統的な教養ある地主貴族中心の社会 **общество** と文盲農民の共同体 **община** の対立を反映し、継承していたが、革命期には、それは、都市的文化風土で育った革命的知識人の主導する、数カ月に一度都市で開かれる代表者集会と、共同体農民のオーラルな直接的な集会の相異を表現していた¹⁾。伝統的に、村スホートは村団を構成する各農戸の家長が集合する場であったが、変動期には若者層や農婦層の参加もみられるようになった。プリズナチェンスコエ村団では、1918年2月のある日曜日の村スホートで、18歳以上の全ての成人へ投票権が認められた。スホートは「総スホート」へ変質し、次の木曜日のスホートでは、それまでになく300名の農民が参集した。だが、村スホートは依然として伝統的な家長の集合を核心とし、農婦は主人の前では自分の意見を控えていたのである²⁾。

スホートでの議決方法に関しては、プリズナチェンスコエ村団では秘密投票は決して採

15) Там же, стр. 355.

1) R. E. F. Smith (ed.), *The Russian Peasant 1920 and 1984*, London, 1977, p. i; Д. Н. Ушаков (под ред.), *Толковый словарь русского языка*, М., 1940, Т. IV, стб. 611, 622.

2) Я. Садовский, указ. статья, стр. 323-4.すでに農奴解放以降、分家と出稼ぎの進展のなかで、スホートへの若者と農婦の参加傾向がみられ、それは、第一次ロシア革命期の若者層、第一次大戦中の農婦層の農村での行動性となって現れた。См. А. М. Анфимов, П. Н. Зырянов, *Некоторые черты ...*, стр. 33-5. スホートの戸主代表制は揺らぐが、革命期を通じて決して崩れ去らなかった。村・郷のスホートが「郷村の市民の総会」に転化したかの如く描くのは正しくない。См. Т. Ремезова, *Выборы в советы крестьянских депутатов до Великой Октябрьской соц. рев. «Советское государство и право»*, 1940, № 10, стр. 90.

用されなかった。農民は「良心 **совесть**」を皆に顯示し、裁定を求め、「秘密 **тайность**」を忌避している。挙手による議決も農民は好まなかった。孤立し「特殊な意見」に留まるのを危惧したからである。左右分離による議決も行われたが、最も一般的なスホートでの議決方法は「叫び倒し **перекричание**」であった。これは、村スホートで問題が提起されると、支持者は賛同の叫び **кричать-за** を行い、「叫び人 **крикун**」が反対グループを圧倒し、反対グループの叫びが静まり始めると、議長は目と耳で叫び声の優劣を判定し、優勢なグループの主張が書記によって直ちに共同体の取り決めとしてプリガヴォールに書き留められ、劣勢グループへ署名が強制されていく方法であった。ここでは、「喉 **глотка**」と「支持の叫び **кричать-за**」が支配し、満場一致 **единогласие** が求められ、多数決原理は採用されない政治の場であった。プリガヴォールをはじめとする村・郷スホートで採択される決議は「一致して **единогласно**」と書き込まれるのが通例であった³⁾。

共同体集会としてのスホートは満場一致で共同体の統一意志を形成する様態をとったが故に、自からの決定に「矜持 **гордость**」を持ち、従って共同体構成員に「恭順 **смирность**」を求める権威的強制の体系を内在化させていた⁴⁾。従って、スホートでは「要求する **требовать**」話法も使われたが、共同体意志への恭順を秘めた「請願する **просить**」話法が普通であった⁵⁾。

さて、スホートで形成された共同体意志はどのように実施されたであろうか。郷村共同体では、スホートの決定を執行する、農民から自立した官僚・警察機構が未発達であった。共同体における行政・警察・裁判機構は、農民によって選出された郷長、村長をはじめとする少数の農民役人から成っており、共同体意志の形成のみならず、その執行・裁定においても、すぐれて自治的世界をなしていた。ここでは、共同体の決定は共同体内の一定の社会的人的関係に支えられて、はじめて有効に機能し実現されえた。農民が、ごく少数でも反対者がいれば会合は不完全で失敗であると考え、多数決原理を理解せず、全員一致の決定を求める際、そこには、正しい決定は唯一つしかありえず、それは共同体の最も賢明で誠実な人に属するという考えが前提されていた⁶⁾。共同体における賢明で誠実な人とは、プリズナチェンスコエ村団では、村スホートに登場する「白髪の賢者達」であり、土地部の議長にスホートで選出された、テレンチ・ニキフォロヴィッチ・スイロミャートニコフであった。彼は60歳を越え文盲であるが、稀にみる記憶の持ち主であり、土地問

3) Я. Садовский, указ. статья, стр. 328-338. ヴィリャチノ村の民俗学的調査からも、「喉 **горло**」と「叫び人 **крикун**」によってスホートが左右されていたことが指摘されている。П. И. Кушнер (ред.), Село Вирятино ..., стр. 40.

4) Я. Садовский, указ. статья, стр. 327-9, 359.

5) プリズナチェンスコエ村団では、この村の出身でシベリアへ流れ、さらにドネツ炭田で鉱夫として働き、1918年春に再び村団に受け入れられた6人家族の А. А. クリーギンが、В. И. ラブリーノフの家屋地の一部を自分のところへ切り取ることを要求した。ラブリーノフは、素晴らしい園もち(表 IV 参照)、近隣農民の信望も厚かったが、村スホートで「長老ならびに同輩の方々、憐み下さい」と請願話法で語りかけたのに対し、クリーギンは執拗に自からの提案の採択を強い、スホートにおける一致を妨げた。結局、スホートは満場一致でラブリーノフの主張を認め、クリーギンは許しを請わざるをえなかった。このことは素早くプリガヴォールに書き留められた。Там же, стр. 326-7, 342-3.

6) G. Gorer and J. Rickman, *The People of Great Russia. A Psychological Study*, London, 1949, p. 135.

題の処理をはじめ共同体業務に長年たずさわり、村人には「誠実と公正」で知られていた。この長身で強健な長老 **старик** は、「小父さん **дядя**」の敬称で村人に親まれ、自らに従え率いる土地部メンバーに対しては、「皆の衆 **ребята**」と語りかける村の指導的人物であった。他方、共同体におけるこれらの主導層に従いつつ、土地割替の実働部隊となったのは、若者層であった。彼らは、共同体内で一夫婦当りの家屋地の分与と厳格な土地用益の均等化を求めつつ、共同体内の自立した農民経営を志向していた⁷⁾。このようにして、変革期共同体において、サポートの決定は、共同体の経験豊かな老賢から成る社会グループと若者層を中核とする共同体農民の主導・協働関係を通じて、有効に実現されえたといえる。

革命期の共同体農民の行動を深く、基底的に規定していたのは、彼らが歴史的に継承・形成してきた価値・秩序意識であった。村サポートに結集する農民が、多数決を退け、秘密投票を忌避し、「各人に直接、良心 **совесть** に従って、秘密なく語らせよ」と主張するとき、そこに共同体農民の内発的倫理源泉としての「良心」の存在を指摘できる⁸⁾。この「良心」が具体的に人格的形象をとって農民に認知されるとき、それは共同体指導者の倫理的資質となる。プリズナチェンスコエ村団では、農民が認知する土地部議長の「誠実と公正」、村執行委員会議長 Г. М. ルキヤーノフの体現する「善良な **добродушный**」「穏やかな **спокойный**」な性格は、そのようなものといえる⁹⁾。

他方、農民には外在的な倫理源泉として、「真理 **правда**」が存在し、それは「法 **право**」として現象化すると意識されていた。プリズナチェンスコエ村団第五組の М. С. ドマーノフは、家屋地の切り取りに際して、土地部メンバーと次のような興味深い対話を交わしている。

ドマーノフ；「善良な人々よ、何を携えてやってきたのか、良きことか、悪しきことか」
測地人；「新しい法をもってきた」

ドマーノフ；「だが一体誰が新しい法を定めたのか、ツァーリはいないではないか」
(返答)；「今は人民の法だ」

ドマーノフ；「何、ツァーリなしの人民だと、こんな事は全て良い結果にはなるまい、ああ」(土地部議長に向って)「はたして、これは全く真面目な話なのか、あなたは良心に依って言っているのか」

家屋地の切り取りを行った土地部の連中を送り出しながら、ドマーノフは「はたして、これは全て正気のさたのことか、真理 **правда** は、神はどこにあるのか、皆の衆、神は全てを御覧だ、全てを」と嘆き訴えているのである¹⁰⁾。このようにして、共同体農民にとっても一つの倫理源泉である「真理」は「法」として外から到来し、それをもたらすのは、地上の「ツァーリ」であれ、天上の「神」であれ、共同体を遙かに越える絶対的支配者であ

7) Я. Садовский указ. статья, стр. 326, 330-331.

8) Там же, стр. 328. Старо-максимкино郷(カザン県チストポリ郡)の土地委員会は、郡土地委員会に異議を唱えつつ、「良心の法から発する公正、これのみ」を考慮すると述べていた。《Казань》, № 512. このように「良心」を公に顕示するために、農民は各種の意志決定の場で「秘密」を忌避したといえる。

9) Я. Садовский, указ. статья, стр. 323, 331.

10) Там же, стр. 338-9.

った¹¹⁾。

内発的と外発的の二つの倫理源泉は、しかし、決して交わらない平行線をなすのではなく、農民は両者の出会いと一致を求め、それを妨げるものに伝統的に敵意を抱いてきた。農民は、彼らの要望の実現を阻げ、彼らを抑圧している地主や地方官吏などを憎悪しつつ、ツァーリ、国会、臨時政府へと権力的幻想を抱いてきたのである。農民の価値・秩序意識にみられるこの二極性はまた、共同体農民の政治風土をも貫いていた。農民の内発的な「良心」も共同体世界では、秘密を避けその顕示が求められ、個人の内面的不可侵を確保できず、「一致」が求められ、外発的な倫理源泉である「真理」も共同体外の権力への受容的対応に帰しがちであった。

スホートに結集する農民は、都市に拠点を置く地方権力から自立した小宇宙的政治空間を創出し、そこに自己を強く同一化していた。プリズナチェンスコエ村団では、都市の「市民 **граждане**」の世界に対して、農民は独自の「キリスト教農民 **христиане**」の世界へ自己を帰属させ、村ではどのような「市民」の決定も考慮されなかった¹²⁾。農民チーホンは次のように語る。「市の郡当局からスホートで土地部を選出するようにと文書が届いた。土地部は村の全ての土地業務を処理するだろう。今は、即ち、全権力は現場にあると表明されている。今やスホートが判断するだろう。誰に罪があるかミールが審議し裁定しよう。都市は、即ち、必要ない。人民の法だ」¹³⁾さらに、共同体を中核とするこのような政治空間は、都市からの自立のみならず、個々の共同体間で相互の孤立をもたらした。共同体はしばしば土地係争を通じて対立しあい、また、外部の農民に対して排外的であった¹⁴⁾。

しかし、この政治空間の自立・分散性は決して、外からの隔絶を意味するものではなかった。農民は共同体にあって外部の情報を吸収し、自らの自律的な社会意識にてらして、これを解釈・同化しつつ対応した。ここでは、ソヴェト政権の種々の「布告 **декрет**」も「命令 **приказ**」となり¹⁵⁾、ソヴェト政権の都市・農村間の現物交換 **товарообмен** 政策も、「物騒し **товарообман**」と言いかえられるのである¹⁶⁾。また、共同体に流入する種々の情

11) 農民の意識においては、「神」は「天上のツァーリ」であり、「地上のツァーリ」と権力・権威序列で一系列に統合されていた。А. М. Большаков, *Деревня. 1917-1927. М., 1927, стр. 426-7.* 現実の絶対的統治者＝支配者を「神」の権威から分離できない意識構造の下で、たえず、超越的絶対者への幻想が培養されたといえる。

12) Я. Садовский, *указ. статья, стр. 323.* 家屋地を切り取られた農民が郡土地部へ訴え、自己に有利な裁定を得た場合にも、村では「市民」のどのような決定も考慮されず、彼へ土地は返却されなかった。Там же, стр. 335. 農民は都市民に対して、農民としてだけでなく、キリスト教徒としても自己を同一化していた。従って共同体農民の敵対勢力はしばしば「アンチ・キリスト」と意識された。Там же, стр. 328.

13) Там же, стр. 322.

14) Бризначеско-Е村団では、隣のクラスノエ村との間で土地係争があった。Там же, стр. 352-3. ボルタワ県からサマラ県へフートル農民として入植した20戸の農民は、現地農民の「ここは我々の、つまり我々の旦那の土地だ」という要求にあい、追い出され帰郷せざるを得なかった。Там же, стр. 349-350.

15) Там же, стр. 322, 353. 農民にとってソヴェト権力は、内面的に創出されたというよりも、外部の政治権力の受容であった。従って、ソヴェト権力とは、布告 **декрет** や回状 **циркуляр** などによって農民に「指図する **приказывать**」傾向をもち、その指図の根拠を農村に見出すことは困難であった。Учительница, *Три года в деревне, «Крестьянская Россия», V-VI, 1923, стр. 185.*

報は、農民のオーラルな世界で解釈され直し、噂となって流通した。この農民の世界は、文盲農民が圧倒的な話し言葉の世界であり、そこでは共同体の歴史的経験や慣習が自律的に継承されてきた。プリズナチェンスコエ村団では、村執行委員会議長は40歳の文盲であり、土地部議長は60歳を越す文盲であり、彼の後を継ぐミハイルも「賢明で半文盲な」（文字は読める）人物であった¹⁷⁾。村スホートに登場する「白髪の賢者達」を含め、これら共同体の指導層は共同体の歴史的経験の継承者であった。土地部議長のテレンチは記憶力にすぐれた長老であり、地主の夏畑を分割する際に、土地部メンバーに次のように共同体の歴史的経験を伝え、土地割替に着手するのである。

「解放令 **воля** が出たとき、旦那がたは自分ら百姓をひどく侮辱した。……草地もそれに沿った麻畑も祖先 **отцы** が話していたように公のものではなく、百姓のものだった。また、農民には森からは何も与えられなかった。旦那の農民は長く騒ぎ、自由 **воля** を受け取るのを望まなかった。」¹⁸⁾

農民は共同体にあって、土地に対する歴史的権源を近隣地主や共同体に対して主張してきたが、その歴史的権源は旧くからの共同体の経験、記憶、伝承などによって構成されており、それらは共同体の長老層に最もよく継承され蓄積されていた。共同体がこれらの旧くからの経験、記憶、伝承、慣習を継承する伝統的社会であるが故に、その首長である村長、郷長は、「旧さ」を語源とする、スターロスタ **староста**、スタルシナー **старшина** として表象されたといえる¹⁹⁾。

共同体はこのような伝統的な自律的な文化をもつが故に、共同体の外の都市を中心に展開した政治は、農民文化の鏡に異なった映像を結んだ。プリズナチェンスコエ村団では、2月のある日曜日の村スホートで、家屋地の徹底した均等化を求める若者層は、「エス・エル＝ポリシェヴィキー」とも自称していた。3月1日の村スホートの後で、一人の農民兵士は、「我々は自分達の間でこのように解釈している。ポリシェヴィキー、これは農民である、何故なら、彼らは誰よりも多いからである。それ故、今や人民の法があり、全ての権力は現場にある。従って、《コミュニナ》も《エス・エル》もポリシェヴィキーと一緒に、即ち、人民と一緒に進んでいる」と語っている²⁰⁾。若者農民と農民兵士という共同体外の影響に最も敏感に反応した社会層が、都市の革命諸党派の影響を受けながら、都市ポリシェヴィキーの実像とは異なる独自の像を共同体世界で形成していたのである。

結びにかえて

1917～18年のロシア革命において、農民の「スチヒーヤ」は様々な状況下で発現した。

16) 《Курск》, № 449.

17) Я. Садовский, указ. статья, стр. 323, 331, 351.

18) Там же, стр. 348.

19) スホートに参加する農民が、その構成の若年化と婦人層の参加により変化しつつも、敬意をこめた長老 **старик** と呼ばれていたことにも、共同体世界の伝統的性格が窺える。А. М. Анфимов, П. Н. Зырянов, *Некоторые черты ...*, стр. 33. ニジネゴロド県では、1918年夏に郷ソヴェトが追放され、郷長、村長の復活がみられた。そこでは、農民が自己の正統（当）性を伝統への回帰において求めたことが示唆されている。《Нижегород》, № 503.

20) Я. Садовский, указ. статья, стр. 325, 329, 332.

1917年秋にはじまる農民蜂起，都市の労兵革命の影響を受けて農村でソヴェト権力が樹立される過程，1918年春に始まる「総割替」，これらの局面にみられた農民の行動様式と意識は，深く共同体の政治風土に規定されたものであった。都市から自立し，スホートに結集する農民が示した行動性は，共同体の伝統的，自律的文化に規定されて，人間の意識的な指導をよせつけず，組織化されえない抑え難い「自然力」のごとく進展した。農民革命の「自立（律）性」が問題とされるとすれば，それが共同体という自律的かつ自立した政治領域において，その発生，展開，目標において，都市とは異なる革命過程を経たためといえる。それは，都市的風土で西欧志向的な知的訓練を経た革命家や知識人からみて「スチヒーヤ」と意識されるものであった。

この共同体を基盤とする農民の自律的な行動性は，1920年代を通じて絶えず「スチヒーヤ」として発現し，ソヴェト権力へ様々なインパクトを与えるものであった。しかし，スターリンの全面的農業集団化のなかで，共同体は解体され，その文化的自律性は教育の普及と文盲一掃，情報の管理化によって失われ，農民「スチヒーヤ」の歴史的土壌は流れ流されてしまう。

The Russian Revolution and the Peasant Movement
—On the Problem of *Stikhiia* in the Peasant Community—

Katsunori NISHIYAMA

During the Russian revolution there broke out the so-called *stikhiia* which was far beyond the conception of “consciousness” and “organization” cherished by the revolutionaries and intellectuals. For them the *stikhiia* of the people was the something that suggested the elemental and uncontrollable force of nature. In this paper the aspects of the peasant *stikhiia* which appeared during the revolutionary process are analysed in connection with the several stages of the revolution. It deals geographically with the Central Agricultural and the Volga regions and chronologically with the period from the autumn of 1917 to the summer of 1918.

The contents of the paper are as follows ;

Introductory Note

I. Peasants' Uprisings (from September to November, 1917)

II. Soviet Power and the Peasant Community at the Level of *Volost'* and Village

III. *Chernyi Peredel* (during the Spring and the Summer of 1918)

IV. Politics in the Peasant Community

Conclusion.

The peasant uprisings during the autumn of 1917 were like an explosion of the

peasants' *stikhiia*. The social conditions which drove them to rise up were ; first, the seasonal cycle of agricultural labour ; and second, the fact that they changed their attitude toward the Provisional Government and gained some consciousness of the political and social crisis. They began to occupy and divide the fields where the rye harvest was finished and which were supposed to the following summer's fields. In the uprisings they acted not necessarily in an anarchical manner but rather according to a certain process of activities. In many cases turbulent peasants assembled in the *skhod* and acted as one ; their activity was limited to the sphere of their community. But in case where the peasant uprisings spread beyond the boundary of the community, social groups such as deserters played a role. In the elections for *volost' zemstvo* they were either indifferent to or rejected the local policies and the local administrative institutions imposed from above. Alternatively, they made them conformed to the customs of their communities. At the same time, in the elections for the Constituent Assembly they had the political illusions about the central power. Such dualism in the political consciousness of the Russian peasantry was traditional, having existed in their faith in the *Tsar*'.

The Soviet power established in the *volost's* and villages was not the product of the communal peasants themselves, but rather the result of taking over of local affairs from the *volost' zemstvo*. It was reinforced by the soviet authorities of the *guberniia* and *uezd*. It worked as a social bond between the communal peasants and the outside society. This social band lacked a potent social base rooted in the peasant communities, but it was supported by the Soviet power in the cities. The Soviet power in the *volost's* and villages constantly conformed itself to the political culture of the peasant community and it was repeatedly denounced as being affected by the *kulaks*. After the summer of 1918 it was frequently dissolved and expelled by the two separate opposition movements : the Bol'sheviks' movement in the cities and the peasants' movement in the rural communities.

In the spring of 1918 peasants began to redistribute one after another according to the agricultural cycle of the three-field system, the summer fields, pastures, meadows and the fields where the rye was harvested. The redistribution was spontaneously accomplished in the traditional ways in the peasant community. It seemed that the peasant *stikhiia* appeared in the process of redistribution. In the village of Priznachenskoe (Kursk *guberniia*, Korocha *uezd*) those whose *usad'ba* was decreased were well-to-do extended families, hardworking nuclear families, peasant proprietors of *khutor* and *otrub*, and families ruined during the war, and so on. Those who demanded the levelling of land-utilization were young peasants and poor extended families. The leading force which accelerated the *chernyi peredel* was the young peasants who wished to establish farms independent from the patriarchal ex-

tended families. They confiscated land from families having more land than the standard, based upon the number of family members, that they set. They constantly established the new nuclear families apart from the old extended ones. In the process of incessant *peredel* which levelled the land-utilization of peasant families in the community there crystallized not clear class consciousness but the social consciousness of communal identity. The *chernyi peredel* in 1918 had developed in this autonomous and spontaneous process. It was accomplished through the conflict of several groups in the peasant community and was not controllable from above and therefore was like a force of nature such as *stikhiia*.

The Russian peasants had lived in the half-autonomous community of their estate. They assembled together at the *skhod*. It was different from the *s'ezd* where the representatives of large organizations assembled by horse and cart at various times in the city. It was the community assembly, i. e., the *skhod* where the peasants gathered directly on foot and shouted their demands. At the *skhod* they were afraid to be isolated. Their decisions were made not by majority but unanimously and were obligatory on all members of their community. The “wise and honest” old men who were well experienced in the communal affairs played an important role. They led the young peasants and accomplished the *chernyi peredel*.

There were two origins of the peasant value-orientation. One was the “conscience” (*sovest'*) which had its origin in the peasant mind. The other was the “truth” (*pravda*) which came from the external world. Peasants had looked for the conjunction of these two value-origins. In the peasant community one was compelled to make his “conscience” public in that “concealment” (*tainost'*) was to be avoided, but because consensus was sought, there was no guarantee that integrity of personal conscience would be respected. The external origin of value was considered to have come from the outside authority as “law” (*pravo*), it thus generated the peasants' passive attitude toward the central government. Thus, peasants, illiterate and living in isolation in each community and rooted deeply in local traditions, made up the political culture of *khurest'iane*. It was different from and sharply contrasted with the politics of city.

Peasants' *stikhiia* appeared in several stages of the Russian revolution, i. e., in the peasant uprisings; in the process of the establishment of Soviet power in the villages and its assimilation to peasant communities; in the *chernyi peredel* of 1918; and so on. The peasants' activities and social consciousness were deeply rooted in the culture of the peasant community. Peasants, half-autonomous from the city, gathered at the *skhod* and participated in activities which developed as a natural force beyond human control. Thus peasants' activities were considered to be *stikhiia* by the Russian intellectuals and revolutionaries who were nourished in Westernised thought.

Throughout the 1920's peasant *stikhiia* had a great impact on Soviet politics. But it disappeared during Stalin's agricultural collectivization which destroyed the traditional half-autonomous peasant community. And still more its cultural autonomy had lost its ground in the liquidation of illiteracy and the administrative control of information.